

芭蕉翁七書 下

~ 5  
6644  
2 止

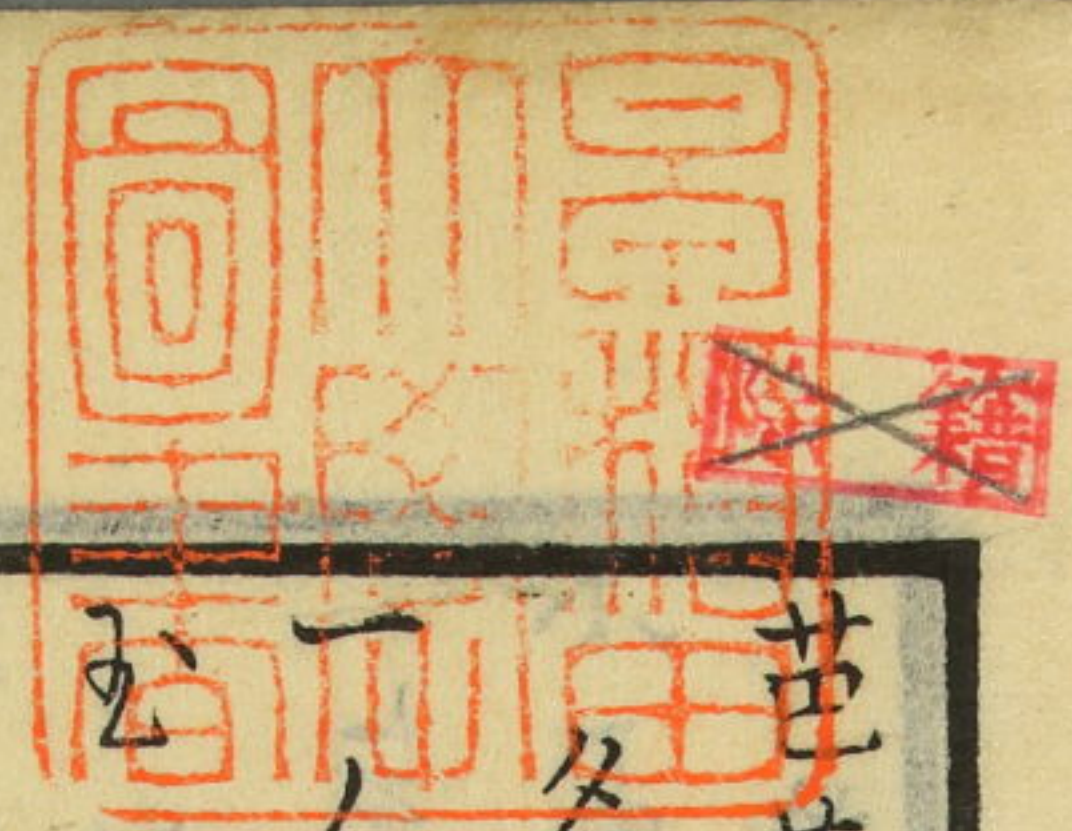


利  
 1454  
 2止  
 除籍

ハ5  
 6644  
 2止



(2002-33(2))



芭蕉翁附合集評注下卷

各月のもやう 一よふ 匠一 阿ひ

一ふでもなれた 梨の 切物

味噌の 位流ふかき 秋北風

一よふかき 一阿ふと 一よふ一ふでもなれたと阿

一らひちまぐ 一ひらひ あふさぐを つけさ

る あり後の 白うしを 將トく 旅神と

玉 味噌の 位流と 枕詞の やうにいひうける

さあ ち依 諧あり 附ごる ぶの子 兩あり

執べきり



付合 F

け宿をまめいて通る 館の御  
まき田うゆりて 夕立此風  
平目なる石を敷く川水場

とどめ此白旗町いづれの家と見ゆる 附合  
なり後の向もまきくよ田家此やうさと見て  
風呂場河原あどいふものもたたく 井戸端  
ふく川水まきくよやまきまき

糸まといへば 次皿もゆるし 八里  
小よつと 於日小むく小横せ云

お向いぬけ糸まといひく 款足才小もかへ

くぬけおの時ひそく小路用の金たのど 益をり  
阿豆よりらぬりあれど糸まといへば人もゆる  
まきありおたろりくゆりおたろりあるり  
あり後向いぬけく小家をもぬけおく 旅平  
かりたるさまえ

四五人 通る 僧 長宗 なる  
二彩 通 町の子ども 乃 龍 智 古 能

お向春乃日 此長宗なる小四人連の差  
法沙のうらゆくふをちるんの町と見て  
お向の能もさてなるんの子どもの能乃

稽古さるるにまぢつけるる之を彩るるよこ  
とバのまことしめはまのしるれど下小能といふ  
てきししたる備ありあはらのつけどろ  
ふりく意味きるるし春色目前  
は<sup>ツボ子</sup>高の里下してハ泪ぐみ

塗たにおよりおの出い入

お向ハ赤之局の親乃もとよ来くまづうへ乃  
うたことどもかくり出くわが家のなつ  
ち小涙ぐむやうさなり後句塗くくお  
赤之局の手及具なるべしおの塗やう<sup>一キ</sup>落

徳のやうまなどめあれむうつくしく古風め  
たくるまことよまづうへさるる人の及具  
かのおおよりつろくのものおしれくもの  
がくりさるるはま<sup>ニ</sup>急味<sup>ニ</sup>つれ<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>何<sup>ニ</sup>ふ<sup>ニ</sup>きた<sup>ニ</sup>ま  
何となき句のやうあれどあうく心を弄ひ  
たるつけ合ありふりく心をつくべし

有明の七ツ起なる茶碗に

ひさご乃れをつけわたり  
然とく起せくひちごふれつける老人な  
どの風情あらむり

小僧のくきふ口ぶく(ききは

やすくと矢<sup>ヤス</sup>海<sup>ノ</sup>の河原に<sup>カキ</sup>ありあり

やきくとやきとひうけり人のとめる

をまいとハギ系先小川をかちりりまは

赤<sup>ガ</sup>燈<sup>ム</sup>のやうき小僧のたまふつけたるなり

かたふらば口ぶくへきる小僧あるべしをうき附

合あり

萱<sup>カヤ</sup>草<sup>ツギ</sup>のなまかりらぬ恵をうき

秋たつ蟬乃 鳴死小 乃里

お向恵を系ふたへたるをうけく後句を

蟬ふたとへくせつある情をのなごり

お<sup>アサガホ</sup>不<sup>レ</sup>れてきた萱<sup>アサガホ</sup>瓶<sup>アサガホ</sup>乃<sup>アサガホ</sup>ち<sup>アサガホ</sup>路<sup>アサガホ</sup>

萱<sup>アサガホ</sup>井<sup>アサガホ</sup>の花乃<sup>アサガホ</sup>ち<sup>アサガホ</sup>際<sup>アサガホ</sup>よ<sup>アサガホ</sup>笑<sup>アサガホ</sup>ろめく

萱<sup>アサガホ</sup>瓶<sup>アサガホ</sup>ふ<sup>アサガホ</sup>ち<sup>アサガホ</sup>ち<sup>アサガホ</sup>路<sup>アサガホ</sup>ま<sup>アサガホ</sup>ぐ<sup>アサガホ</sup>き<sup>アサガホ</sup>く<sup>アサガホ</sup>を<sup>アサガホ</sup>う<sup>アサガホ</sup>く

なま<sup>アサガホ</sup>附<sup>アサガホ</sup>向<sup>アサガホ</sup>ハ<sup>アサガホ</sup>その<sup>アサガホ</sup>切<sup>アサガホ</sup>ふ<sup>アサガホ</sup>く<sup>アサガホ</sup>萱<sup>アサガホ</sup>ふ<sup>アサガホ</sup>ち<sup>アサガホ</sup>が<sup>アサガホ</sup>不<sup>アサガホ</sup>の

花<sup>アサガホ</sup>を<sup>アサガホ</sup>に<sup>アサガホ</sup>不<sup>アサガホ</sup>い<sup>アサガホ</sup>き<sup>アサガホ</sup>り<sup>アサガホ</sup>か<sup>アサガホ</sup>る<sup>アサガホ</sup>つ<sup>アサガホ</sup>け<sup>アサガホ</sup>向<sup>アサガホ</sup>ハ<sup>アサガホ</sup>に<sup>アサガホ</sup>不<sup>アサガホ</sup>ひ<sup>アサガホ</sup>とい

ひ<sup>アサガホ</sup>て<sup>アサガホ</sup>き<sup>アサガホ</sup>く<sup>アサガホ</sup>ふ<sup>アサガホ</sup>と<sup>アサガホ</sup>を<sup>アサガホ</sup>つ<sup>アサガホ</sup>け<sup>アサガホ</sup>る<sup>アサガホ</sup>とい<sup>アサガホ</sup>あ<sup>アサガホ</sup>の<sup>アサガホ</sup>も<sup>アサガホ</sup>な<sup>アサガホ</sup>く<sup>アサガホ</sup>た

ほ<sup>アサガホ</sup>つ<sup>アサガホ</sup>ち<sup>アサガホ</sup>あ<sup>アサガホ</sup>き<sup>アサガホ</sup>や<sup>アサガホ</sup>り<sup>アサガホ</sup>に<sup>アサガホ</sup>つ<sup>アサガホ</sup>け<sup>アサガホ</sup>る<sup>アサガホ</sup>もの<sup>アサガホ</sup>は<sup>アサガホ</sup>松<sup>アサガホ</sup>つ<sup>アサガホ</sup>ね<sup>アサガホ</sup>ふ

何<sup>アサガホ</sup>の<sup>アサガホ</sup>り<sup>アサガホ</sup>の<sup>アサガホ</sup>ぶ<sup>アサガホ</sup>い<sup>アサガホ</sup>ー<sup>アサガホ</sup>

から白も病人何れバがさぬ

たぐはくやましく 出る 髪なゆひ

たぐはくた附合なりお向病人の何るあか  
ら白をかりふ事とふふさるわりをうあはま  
たかり後白ハ髪なゆひのひろくはくやきて  
胸るやうきあふ小ハ病人何るるを志りける  
との附合あり

あま玉の縁ふもの思ひます

けハへどもよそへども 君かつりそす

あはらの附向公御あらで 誰りつらりはをた  
かと思ひの意をよくのべぐるものことと金を

見初くよりかたふまのうきとハまりながら  
あま玉つるもわかき水とあま玉の白思  
ひかけどもとどめく 出はひものいひたる縁  
よりあゆく 君びがさくお向のよなるる  
あま玉とよどもとよりうきと思ひましくいふく  
とけハひよそへども 君ハあらぬ髪ふつ水なきこ  
あるあま玉とちうらめさの空ねハさく小意  
の白とあま玉とつらりむべなり意向といへ  
たぐはくもしく たぐはくならぬ人言の及ぶふ  
小海らぎすく 意向ハちうらめりふく心

をつくらたるゝ

田ツ風の稲をそあらは月夜に

風ひえろむる斗の子乃旅

附合たゞろの地ふろく斗の子をヒキ

他國へ暮るゆけま建及のさぐごと

死むハ人の何ふたのべき

神風や吹起け水くかい足ぬ

あふハ二句ともそお中て常人のいひ出づき

りゆあらばお向人ハ死るまでそろのけれい

つまでも生きたハあさましくむとらあそろ

をろくふもちくたもてまハも一人の死るる

なたものあらバ何のちたと清徳をの

べく人ハ世にたうで死むこそめやそら

死むと兼好もいつり命をそハ死むとも

いひくともく人のそくはるるのそを

及ん若のあらそあり後句又斎好のつけ

合うく係乃翁の人をそるる松あり

不ふその人死むハ人のといへるお向あらバ

釋教シヤク連懐乃たぐひをそそ思ひゆるべきを

神風やとハたきるそむむたふたふ附合も社理

あらむにやめりぬ。人の神風小吹おとさぬ  
かいたるは時かきぬ。よしのまきりこころ  
さげりも何らばふ<sup>カ</sup>の恩<sup>キ</sup>後なるぞと  
こそ何こはむ

十六音もたなり。名ふ小海りり

あつるをかくさ。お喜の秋

お向ハ名月の歌も十六音もまづりく。因  
ド名ふよかつりく。月を見ーとつゆめ  
後向ハ商人のあらばさふ利成むさがる心を  
かくーく喜ももきこゆれどはよハ何らド心

何の袖喜の秋のがえさるるをかくーく  
とつねに袖喜とありとぬるといふあるな  
らむらゆもいまむおごやならぬおふけみ  
ちのたをふとよべーとまれくまれその名

ふふくごものたご喜人に見るべー

袖あり拂ふともの松明

五月まで小籠のわくもぬきほむ

はきもりのあつる海や

盃成るくらふ火籠衣巻く

年暮ひとり日待つとむ秋



いらなる。附向あらむはくりがく

彼ハかきみのあまを 勤りき

空のくは干なぐらに いう能

あ白波よあまのうつりくかきぬる。氣のう

ごくとつふ白波白は千見の家あいう能をき

ゆる浦をこの家

城小の初雪たあぐく 心懸ぬぎく

おきくく火を吹 障つさけ妻

あ白の家ふかつりくく心懸をぬげバ城北の初

雪をわくく之後向ハ城をのりきくく 暁

たまぐくをくくくいひのぞくり

黒木ふきてなる。谷かげの小屋

待が娘と身をやまうをむお思ひ

ふかきくくもいらならむ 誰妻とちめてを

やまうをむなどお思ひぬる。谷うげの小屋に

御まきさかぬハ黒木とくもふふまかりたら

むをくくかりぬをき娘とら

水のいハやふ 佛 きぎみく

ホるまきま 流傍の涌流に 続うへり

ろのあぐりせりき

知耳入ふ糸喜夫もたのが名を替て

意に古風乃 殊る 異々解

糸喜夫が知耳入ふたのが名を替るを異々解  
のよふりと思ふにげよもみちのくわりみぞ

古風の意ハ何のべき

け 糸喜夫の意ハ何のべき

け 糸喜夫の意ハ何のべき

へたる布袴はむり 何ぐトた郎が思ふ糸喜  
らむ

おふしハ塩屋まぐ 糸喜おもらひ

乱<sup>ラム</sup> 糸喜のちハ 糸喜

け 浦糸喜言たを糸喜く いろもゆゑ何人  
の糸喜おらなるならむと見ゆれどたづいつり  
ねドと世をもて何そびみるおれが糸喜を  
べくも何らだおしハ塩屋まぐも糸喜ておも  
らふを糸喜 後句もくハかのを糸喜ものか  
まゝの糸喜けが糸喜の糸喜もよく糸喜てか  
め糸喜おふり後ハ糸喜も糸喜らだどりよに  
けて糸喜糸喜ものおもらひおれとつけ

体ものありうもいつの伏乃乱のちぞ  
 雪乃ふさまをほくる春風ふくむ  
 古の石れとを浮世小まとりて  
 高臥雲松の隠し糸がごとく  
 え結のつれづれかふる衣づき  
 人の情をほくこふ柴く  
 こも又きとりがごとく  
 陀代えはがま本曾の椽のま  
 月の宿亭まはりづき 指出よ  
 お句陀代えは陀代えあり陀代えといふこ

とはいれなきありあれど陀代えの陀を田舎  
 く陀代えともつらひ来たりかふるゆゑなき  
 りこのむりまはあらば句えは行旅乃  
 身の上して陀代えの中より本曾の椽地  
 實をとり出せば内まえ後句お意なり  
 唐人の志れぬえ糸ふふらぶきて  
 志ばらく俗耳ををかする僧  
 黄壁流あどの僧乃子孫ありく志ばらく  
 還俗したるが唐音をよくしめは衣に  
 後代をたふ人たふら来る時お出はひたると

いふ附合あらむりはこれのれが法ミヒト律ヒトもや  
 赤きかゝらをちづるま柳  
 花さけりミツカ舞ミツカが舞ミツカ成かきみよて  
 赤白のころるい里の子乃赤がらをま柳の  
 舞るといふ白あふれど後白よてい赤きかゝらに  
 舞のまがふとりあふかくつけたるもの  
 尺ゆ舞り舞あらばよりの花ら後合乃  
 花り  
 塩つけく餅くらふなどのま柳  
 ちづくこりどはま乃引たづく

赤白の家ホ何れがミツカもる飯を旅中何れが  
 のまホもるといふ舞のころる飯あみく餅は  
 塩つけくらふなどの旅といふころるをうけてな  
 ほ旅のころるをいひつけたり  
 やけりたれまふミツカ舞子  
 四の折の蒲團に君が丸く舞く  
 赤白を意のよび出と見て意なつけたるま  
 此も公卿乃係の意向をれがまもつてままでよ  
 した向ありつら折乃蒲團の上よつと丸く舞  
 たるまがくえまいりだ艶なるへりてい赤白

加合  
下

の撫子にたへたるころえ

花さ乃家と見えたるちよの下

細き井溝をのびるよの紙

きこえたるほ乃春さ

のちよにあらさ伊丹洗白

琉琉小キウ燈ヤ糸ラク ぶダるミのまがへ

産年 伴丹流白のちよまをささえてのちよ

たあらきよハ必定 命の家と見えて産年

のまがへささるさ後をつけり

見しられて出付ありし本音のさ士

娘入エさるヨよりリたやハ鳴ミ子コ川

本音のささ見しらる人位ヒト娘入コさるヨ

ま鳴子川流白なるべしまをささ附合ハカ

くのぬくゆくまの向の位をささむべし

草赤ま百石たれ門がぬへ

とよりふ負とふさふらの坊方

ささぐまお向の人ささなるべし向えハ解を

軽に及ばき

干おつさやる糖をの紙

と拭のまぎれくろくをささむのり

付合 下

十一

前白つねの不ちれど後白たのれが精色をまき  
らば干抱つけるにうれ者も何らば<sup>ハタゴヤ</sup>後  
たうどの物と見まうつけるに侍てま拭きゆふ  
屋の風名よりまぎれをいひつゝのるたま  
美者どもの旅連ちのまべー  
細干き場をま鳥のたまれぬ  
編 必き 従り 入る 何ゆを  
公の白ちれどけのたま縁ふを  
のくお 然乃かす 廿細  
細の子がほ恋習ふ 秋乃風

くまれど公のたま白かまぐもめでた  
あとおつとく奇ならはるあーのくお  
とつあ白ゆ佳り恵の白を思ひつゝむきれど  
のふとつふまて場ふくかちひく  
まゆりの酒乃辛も付ふる  
月もと香と見ぬ 鷲馬の市  
吉洞そ縁  
持衣を破ぬぬ 小おくぬて  
衣をまふら名我君にまらばや  
お向たぐんたらぬ人の思へるに何り

おちろりりりたかたぬると思つてついでに  
ころちろむらけれは破のぬる結を  
うちろりりりたかたぬると思つてついでに  
中へひり君ハ志らきやとあるにけり  
がし君のぬりまきぬぐみまほ ままよき  
かきらふらまきかきまできらきまきまき  
危きを旦愧且突  
流るるたつる 魚水の札  
尸カシゴにきぬ著ちろりりり連のぬ  
子コ澤シ水ミをいむハぬるりよてまほらむるか

つげくるあり  
子ホトキス親キス瘦スるやふらむらむ  
わがお思ひ浮世一人  
お思ひまゝる老ハ一人うと思つるハあへての  
人の情あり一ありもふのこもの思ふとれ  
なくよめり意向ハ一人情をつくらぬ水  
ば意向ハあらぬとあるべし附ぞろハほと  
とぎにの瘦くなくといふを意ふたとへて  
一たり  
けあをいむとまぬバドモリあき

新編  
古今  
和歌  
集  
下

五

うたれくかへる中の戸は  
 意をいれむときれは  
 白なる奴やちくくち  
 かへるを付くり  
 火をたけは答の洞も  
 ぬま羊ふ跡き  
 何れのまへ  
 お山のさたる  
 入るは  
 入るは

お向ひにも古風なる  
 つけるならぬ  
 白くちりふりり  
 といふ  
 瓢箪の大は  
 風ふふくれく  
 何れも  
 云ふ  
 おと見かつ  
 たる

新編

五



安の市を思ひよをたり長安ハからんたの  
みやとありりづぐもほれ都の舞臺<sup>ハク</sup>を  
は地ハ人情<sup>ハク</sup>舞臺<sup>ハク</sup>より名刺のあつたの  
ふりハはもの之長安の舞臺<sup>ハク</sup>待たるく  
見ゆ

醫のね不たところ目ぐるやれ  
いろぐと沙をのふたち出く  
たのれも醫を業とさふものころまことふ  
醫力たるたさう自ぐるやれいそくと  
沙をのふたち出はむべく

ひとめ世ハやくさの 後 六

け里ふ古きをそふ乃名をつて  
里もたつてつものむり代へ回れ  
をつけるより世ふたやくあよりなり里ふた  
人ふえらぬたれがおりの家ハ頼ふさののりま  
でもせハやくとの附ごらるや  
は結たうをぬる乃何けがの  
そぬぐやほまりうがそく何てやうふ  
るの何らなれもそ結たうをぬるとふをぬびて  
かふる人と具くそぬぐとつける奇をぬ

かぶそく何てあたらあらむハわりあるべー  
 風ひきあふ七年のうつくー  
 ちもつらむはまのち猪もまぐりまぬ  
 風ひきてなもまきまぬなるべー  
 ぐふろのりをつけたる一辨之  
 おいろくはれた船後ありりり  
 月と花はららの高松をわすく  
 あれもそのふと  
 破れ戸の新弁付る春の末  
 見えハ淋しきあまの 枕より

破れ戸といふを農家のはまこー  
 ちもつらむはまのち猪もまぐりまぬ  
 家ちりて賑ふつてむ十寸後  
 きの思ひある 種子のおいひ  
 きいめくいうある 附ぞろといふのハちハ  
 きどおがろけりゆくゆーき白之十寸後の  
 家ちりた種子のお思ひあるべー  
 人きくいまぐり産の白ひりる  
 幼嫩小志ある 者乃 片 隅  
 ちりハ二句も源氏物語の面影あり

厚くぎん草の阿のゆるるれ中よ  
垣植のけしげきいんがけい

こまさらもかのよるひびたあそたうりよづら  
をつけりともみえぬがみさくすくつきてえ  
もいりだちあそい草の阿ゆるるれ中よ  
たくりあけて馬をぎんもあくらむ垣のけ  
げのきいもまらむ

阿やにくひわづらふ妹が夕なごめ  
あのきいあたる目つくむづ

阿やのくひ阿をねくよえほゆるるるをん

け向をどきくひゆめあそるま阿らだ縁い  
はきまきまごをいりその阿やたくの共たを  
けなた人あ思ひゆく及ぶぬ意あゆりた  
まりつと思ひまきあそりあたらだやを思くハ  
かきし山を見ていあげくあるべしとて  
お思ふ人ハ夕なごめあそるもの之後句き  
泪あつむといふたも一ろた他につけどろ  
ハまきまきよるの人あつけるあけ

月あつハ乃そあそく清きふ  
石もまきまきく鞍小居ぬがり

けつけけけけ之ほく敬味をべし消けけたと  
いふ小居ぬぶりとひびくをたるとあふふのめ  
をいふむとまほふにむし〜〜〜のめと  
秋の田をからきぬる〜〜のまじりて  
け〜〜あがらふ字白ふまゝ

お向地境田地たのふの〜〜の〜いづれもかた  
農家の者どもあれづみ字〜〜らぬものが  
ちあふふたあ〜〜り〜る人ふさ〜〜ゆふ  
あ〜〜はま〜〜借状<sup>ソ</sup>〜〜あ〜〜のふ字あ〜〜  
いふ〜〜〜尾<sup>ソ</sup>底の本せ楽屋

馬世

ま<sup>ソウ</sup>ま<sup>シ</sup>ま<sup>セ</sup>子の瘦てかひあふた

本菜屋の子乃病がちあふるといふた〜〜  
合ちりり人懐世態をつくちり〜〜本菜  
屋あふれ人<sup>ニム</sup>あふも<sup>ニム</sup>能<sup>クニノ</sup>贈<sup>サ</sup>も<sup>サ</sup>自<sup>ニム</sup>宣<sup>ニム</sup>あふ〜〜べきをと  
〜〜馳を子の瘦をと〜〜ふ〜〜ろ成下に  
あ〜〜のり

花の<sup>タム</sup>流<sup>ヤ</sup>美<sup>ヤ</sup>あふりあ<sup>カサ</sup>〜〜

田<sup>タ</sup>あ〜〜を〜〜〜<sup>サガ</sup>〜〜

あ〜〜〜るあ〜〜附合之流美あふりの〜ら  
あ〜〜〜人あ〜〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜

人よ知らざれば花よつみ霞よつみ  
あゆみく人あふれどもさうり人あふれども  
さげぬが田中しうらひて口は磯くさくさ  
はとも海き清きまのりといふ其の句をいと  
しうらひの中しうらひては人の心は人を  
はと  
何このもきそのうちしうらひ  
里見文ゆく牛の目見ふく  
人のよくしうらひの句あはれは  
其の容の花はれはさうらひとあはれ

吸物ハ先出ウけりしー さまいせむさ  
お向美苜蓿の花乃ちる庭ハ多々家よてハ  
らトと吸物乃向とあるるをうけりし  
せむさハ西園の名産海苔此名あり  
はー木つきたれ月のかね  
苔あがら花よはさうらひと水  
おえち  
火ともしうらひの句は  
ほととぎしみなき 休ぬり

ほ林幽寺趣

御合

三十一

隣をかり〜車 川 ちむ

うき人奴 担キ穀コク垣ガキよりとくぐらさむ

古ものがくりた侍ありかぬてとるは思ふべき  
よしを執りまきく思ひ車よりちのりひる  
りふろのふくゆくふちあふ車の喜れ忍びりぢ  
僕の家一川く〜れくよこあてもるれと  
りて出むへたれどとまね思ふは身なれば果  
をゆべたふあ〜ていぐせむと思ひりづらひて  
担穀垣より入れたる之はるよ垣ハ井の垣も  
樂の垣ともささげきをあらた〜りか〜き担

甲

穀垣をくぐらさ〜はま〜夜のせつあ〜情をえ  
たりかつ〜人〜ゆ〜よ〜く〜ひ〜き〜め  
ま〜と〜ゆ〜公家の意向より〜りて〜は〜らふ  
人音の及ぶたふよあらざさむべ〜河ぶ  
登し

まを天ふるぬ月の 影ぼらけ

湖コ水スイの秋乃比らんれゆき

はごろれ附人合ふありていま〜と〜よ〜ん乃  
まの面目を〜あ〜れたる時なれば解きま  
たそれ〜り共の向も〜とよま〜らぬ〜る向ふ

御合

三十一

て一句つものくまらて 妙なる天うらよふ  
 文字あらふちうら河りかゝるつるのた潤子  
 をまけく 湖水の秋とつけるるらんを句のひ  
 つりりといふ句急ハ湖水の秋ハ比るれをあら  
 時と時をほいさるる之げをもぬぐくの空さ  
 るゆくとわけて 湖上ハ有ぬの月乃さるりて  
 ら比るのねれふくもらむ画申し  
 布子<sup>ヌッコ</sup> 着 習子 風のゆふれ  
 押合く 藤てハ又とつ かり 松  
 布子 恰の松やつるなたとる風をど吹てゆふ

ぐれのきまし 小きき以よ五人連の藤を急  
 しいまぶゆが小なきに松もつるば 藤てハ記を  
 てハ藤るゆぐ ぎ 神さまとまふ布子足習よ  
 此の河らひぬといふもるり彩ら  
 習子むら小蛙まハが体ゆふまがれ  
 藤の葉とりりに<sup>アム</sup>打ゆりけき  
 昔向を其のきぐと見くつけりり打と  
 老く 藤乃葉とりみおるるが蛙をたそれて  
 行打ゆりけし たるはまこころがぬしきれど  
 るれハ庭くろよさう河小まふよたてくべ

たよりまはるはどりりれどたりづれよりつものこ  
能はれの七尾はあははるた

魚の骨志りづるまでの壳をこて

あはれも公羽の高とよ名高た附合ありあは向  
もよた向之能はれの七尾乃あははるもはるり  
らむちとよふふ玉乃果よりしく雪も高く衆  
もふくらむされどおはるやう魚の多きふな  
れをかくつけりり意味をわい何りいふは  
きふともけ向のぬをつくきりあははるれば  
骨をとりおとく

まうり屏風をたをん女子ども  
河原ハ味の實れ子倦した

河原のかとひふ屏風りまりたるを女子ども  
ものけとつきてりたをりたるをかく見たる  
附合あり

僧やうききく寺にかへあり  
猿意の猿と世を種る秋の月

あはれたがひよーたる附合あり僧も寺あり  
猿意も家にゆる之句甚高細意慨何まり  
あり



111

五の一本生木つける

三十一

口代えふもよごれん思ふこのた

みほのけきささめ

でつちがさほふ水とがらり

戸懐子も世延がとひの素衣を

お向はん花が向よてたどめ薫とがらり

りよ向なりしをま異のふもPさべたやと

公おまたづぬるに好むゆめはあらざれも

下たさるはあらざといりれけるふよりて

を水ひかへたりと云云末おに見えり

け合ハたどるのゆふなり

まろくと草鞋をゆる月夜

登をふるひふ起し秋

おれも名首をた附向よて信ふ凡依借乃

まの的ちりお向いころくと草鞋をつらり

はよろちのあま下此登をふるひふ起く

つらな男とちかふるはまえお秋の二字甚う

くら見ゆ

ゆがみく草鞋の何りぬ掌

るの度小志づらく居てはうちやふり

角合

下

三十一

内ウチの道具乃ナニ或ナラハゆぐも或ナラハ蓋フタの何ナニにぬも負オシ一  
け乃ナニやナニさナニいナニくナニもナニ匠タカ途チの人ヒトと負オシてテるルもモ匠タカは  
も負オシつツるルもモ匠タカのノいイふフ不フ可カとト此コ處トコロもモ志シググ一一  
めメけケ物モノもモまマまマとト此コ凡ニねネをヲまマへヘ一一けケ向ムカまマのノ  
のノ名ナたタりリをヲ附ツケ合ヘちチありアリ  
けケまマぐグ一一ふフふフりリりリたタるル意イをヲしシくク  
浮ウ世セのノ早ハヤハハくクなナ小コ所トコロ ちチのノ星ホシ

おオ向ムカハハまマをヲたタくク一一たタ人ヒトのノけケまマぐグ一一ふフ意イ一一たタ是コノ  
後ノチ向ムカ特トクドドてテ親クニ愛ツクのノ情ナリをヲたタこコ一一小コ所トコロのノ早ハヤをヲ  
いイひヒくクちチのノ不フ可カ極キョクりリ一一志シ情ジョウ多タ一一おオ壯ツヨク

いイくクばバくク時トキぞゾ老ラウをヲいイふフむムといイへヘるルあアくクろロくク小コ所トコロがガりリ  
けケづヅるルちチらラむムとト何ナニゆユくクもモとトけケづヅるルちチらラねネどドも  
あアまマいイたタどド世セのノ中ナカふフいイひヒつツ一一たタ教キョウ師シさサ小コ所トコロ  
ちチのノいイひヒくクのノちチはハとト念ネンまマまマぐグちチらラりリるルもモ  
をヲしシくクるルとト

いイのノあアまマとトちチのノいイひヒつツ一一たタ教キョウ師シさサ小コ所トコロ  
のノいイひヒらラ小コ乱ラン遠エンさサるルもモ花ハナのノ信シン  
けケ向ムカもモまマまマとト此コ凡ニのノまマ面オモテ目メ之ノ附ツケづヅるルハ  
いイのノあアまマのノあアまマとト此コ凡ニのノまマ面オモテ目メ之ノ附ツケづヅるルハ  
遠エン一一くク何ナニぞゾちチのノいイひヒつツ一一たタ教キョウ師シさサ小コ所トコロのノ信シンとトしシくクるルとト

西のちふ極なる春の日のけしきありて  
ままどくも目おのめし名人の句をつら  
ろろふ字ささげんべうぎ  
夕めしにかまさごとくへば風草を  
軽の口交をかいて氣味よた  
前句いつもく夕めしよにかまさごとくふ  
て夕方よりささげんべうぎを  
いひたる之後句農家と見てて  
み出く夕めしよにかまさごとく  
は之輕の口交といふよて  
三十一

一休し  
近せしした殿よりのみ  
上坐 禪と人ふ  
諸侯の侍と見て  
よとなく侍と見て  
入りの侍と見て  
と坐 禪と異名をつけ  
はるの  
何を  
花とち  
三十一

係の観想乃辨之世の中ハ何を思ふも  
だりり之何もくもき詠乃やうなるならた  
ものよとのふあろふよりて西念といつけたは  
たうり後句ハきこえく保まへ之

何思ひ字 オホカミ 狼乃あうく

夕月秋思の萱根社 カゴ 廟 ヒメウラ 守る

其ころ之

持より田の妻やだていさだよき

加茂の社ハよりきやしる之

洒落の句之お句をか茂の何より此理とみ

その附合たり

るのやどり乃 ヒメ 糸 ヒメ 糸 ヒメ 糸

とる眠る妻詠るのむれたあしとらよ

お句無名を迅速といふより係の観想をた

しと世の中を何んかたちとむよりま

詠るは何ごころもななくとるとるむれたと

かへばまとの附ごる

片隅小虫 ヒメ 虫 ヒメ 虫 かなえく暮るの月

二階の窓ハたれたる秋

附ごるまわりり入りり窓のたれたる者ふ

夏より実のりふちかめていながさ  
持病の虫歯をいして片隈よが  
千いつのるより二階の空の階たちて  
やちやうとれ白之人情世態は  
て誰り志らむ

船の葉延のちうらなき風  
心乃ちどめよ越る北荒山

お白い何ごとちあき白なき  
何のかとといひ一人の思ふ  
桑心一先東園のがくを

めく北荒山を越る  
白くは松がまれば

鞍を三葉駒に秋の末

ほきあはる何さや

入込小波の涌河の夕暮

中ふもせいの高き山ぶ

入込の河の中よひり目たちて

さげ山ぶ一ちらむめばま

細きさざり意つめつ

お思ふふおくへとせつ

お向なへく意いりづらなるまぢりつゆのめ  
て命きつるならむいぢれは之後向ハさでふ  
菘ひぢのつきりく山ともありし意をのべ  
くはまぐと物思ひめぐらしくハ命も  
何よりハとてまいきてとするべくも何らぬな  
ど思ひ志づめ存ふは猶さえありてまむ  
はゆいりりしてりものくよあゝろの何よべた人  
ハろろなるくむりにまむるはまかなし  
りりぬぞし  
秋風の船をこいが存流の音

厚ゆくくこや 白子 あり 松

この又後向ハ子松よむ花のけりり此一多田  
とつふ向ちのうがれのれとの二とを記とをけきた  
一多田よとてまのるつり 石日ほまりなる白子  
のあ松のなとよもゆきていせの因れ葉ゆい  
りくほづつぬよは附向を思ひ出くそぞら  
友人の恋しうかりがく又は向をよめバかの  
心を思ひかてあつり たまふりりことを  
そえつ向ハさええたるはゆい

晴れ死める 及の陽也

何よりも膝のうつろひありある。

及びこよ明れのたをぬりてはなほいりたりは  
りれならむまことよも亦も去も泣ぬべしたど  
膝の何ぞろもななくも其死骸ミの上を飛  
まひるはなほよはあらでうつろひあるはなほ  
りれあるとのさるろを下ふふくみてたどあ  
向ふかくらだりたをりて附たる向之あら  
らをも向のたこびとりよははこびをあらざれば  
附合ふとこし  
ウスキ 藤ふ日をいといはる、 俵かこち

終つて見たきと泣たまひりり

何りのまくなれどろりき附向之

酒で元たれ何そまたあらむ

双六の目をのぞくまで苦るりり

お向板も屋老飲くらして双六よふけりぬる

男よても何らむりとしての附合之世よ何んぞ

はまの人ありをうし死附合ありらる

中くふと百ふ居れば登吉あり

わが名ハ里乃形ぶりものこ

たのれが方をかきくつらり何んぞふありて

御給

世を<sup>ガム</sup>登<sup>ロウ</sup>昇<sup>キ</sup>ま<sup>シ</sup>、執人と見てつけらる

月 ねく、ふぬわこは 月

花 蔭 阿まりほねけばうら枯て

お句まことふたふとき句之た、つくろひび  
いひ出さるめさむるむらりゆのま句か  
句よ、いよどさぐくゆる句よ、あらされづけ  
るかひちのそと、誠懐句も又一さ、いよぐら  
花蔭ハ阿まりまねくゆ、愈ふくら枯るとい  
お新趣つゆもお句ふれくら、だめでこそ附  
合しつ志し附ごるらきこえたるおのこ

一貫の跡むつうとを、一貫

殺<sup>シ</sup>者<sup>ノ</sup>乃<sup>チ</sup>茶<sup>ハ</sup>飲<sup>ム</sup>分<sup>ハ</sup>あ

漢<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>因<sup>コ</sup>が<sup>カ</sup>疾<sup>ク</sup>で<sup>カ</sup>茶<sup>ヲ</sup>を<sup>カ</sup>づ<sup>ル</sup>ハ<sup>カ</sup>中<sup>ニ</sup>殺<sup>シ</sup>酒<sup>ヲ</sup>を<sup>カ</sup>づ<sup>ル</sup>

といつるか、いづくもよきうあな、べーかる

高<sup>ク</sup>趣<sup>ノ</sup>人<sup>ハ</sup>一<sup>貫</sup>の<sup>跡</sup>むつうからむ

わが<sup>キ</sup>依<sup>リ</sup>ら<sup>ル</sup>も<sup>キ</sup>に<sup>キ</sup>報<sup>ル</sup>ち<sup>キ</sup>来<sup>ル</sup>

山<sup>ノ</sup>伏<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>斬<sup>ル</sup>、<sup>キ</sup>かけら<sup>ル</sup>茶<sup>ノ</sup>蔭<sup>ノ</sup>茶<sup>ノ</sup>

お句のや、れ世の中みづれがり、た時を  
見つけける、つよく句をつくらば、かくのめ  
く、何くまでもつる、べー、安<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>とい<sup>ハ</sup>、<sup>カ</sup>臨<sup>メ</sup>の

御給

三十一



中山山伏を斬たりとつありありの侍  
も何ぞと

まおむく私るはれよ何なる

わくこめて何なる及の太日

はきささえなり

苜蓿片の何に

鯨

さげゆ

ふびたつ池裡鯨の宿れ本後市

相國寺牡丹の花乃生さふて

椀

の蓋とははさぬみ味の子

おみさの牡丹見ふたしなつらびて卯のく

後ふむくひらく椀のふことれはさぬみ味の

子まじく斎醃なる料理なりとの附合え

むのしお小鯨魚注をな

きぬくハ音の鯨のハ泊をさて

お白いうちのむみしがごりをしてり鯨市

を注とれむたりまぬしれ後句ハ鯨魚

買の何みれ共どもがや月ハ鯨小うち市ありて

いろく乃珠ありてたむれたるまにひ

つぎれ何れ不のくきぬくも其はまがこよて

下巻 二

三十三

ゆりーあらむり

粟くけの批テウ炸チムえめを叙シねほ

汐シ内チしりくシ敷シ星川シのシ橋シ

お白シのシ嘘シとくシ者シをシたシちシくシ粟シくシけシのシ批シ炸シけシ

くシゆシきシしシ之シ俯シどシろシハシ其シ人シをシでシよシ星シ川シのシ

橋シみシかシりシくシ敷シもシぬシえシなシれシたシきシバシ批シ炸シけシ

まシよシ星シ川シハシ汐シ内シしシりシ叙シねシろシしシきシらシとシ吹シ

あるシとのシ時シ分シをシ何シをシたシるシ之シ

塚シのシわシらシびシ乃シ怒シるシ石シ原シ

虚シ無シ僧シのシ怖シみシめシぐシりシ何シもシ春シのシまシ

屏シきシろシろシ何シもシぐシやシしシよシもシきシとシえシ又シハシ出シきシよシ

なシたシがシやシしシよシもシきシしシゆシもシのシ小シくシまシ水シ解シ

か

刻シきシ初シ小シ濡シわシくシりシたシるシ蒼シのシ花シ

よシあシれシしシ細シ小シかシ敷シ麦シのシ粉シ

蒼シのシ花シはシけシくシりシしシりシをシ在シ不シはシけシまシくシて

きシくシぬシきシ是シおシふシ麦シのシ粉シ乃シくシ保シまシぐシらシ

くシきシりシとシりシふシべシ

月シ夜シ小シ娘シ友シをシ洗シふシ操シ出シ

火シとシもシしシくシ破シ何シてシがシよシ子シ休シとシちシ

三十三

附合  
下

あらもたむ村居のまぐさ

今たや体 草羽織を足連立

草羽織の 襦子 袴もかくおしく

お向ハ侍の子乃ッ美者どもが同ド草羽織を足  
つれて 洒<sup>シユ</sup>律<sup>リツ</sup> 章<sup>シヤウ</sup>皇<sup>ワウ</sup>など一ゆく及と見てむよ  
ゆりを羽織の襦此見ゆるに見つけられどと  
かろはゆ 袴まは附合之是亦人情世態

日ハ毒く なるは 二月 朔日

お花小伴勢の 袴ハカマのとれおしく  
お向を侍勢の 袴ハカマとれおしく たるもつてもめでたし

お花の 袴ハカマより 袴ハカマとれおしく たるもつてもめでたし

みどりけさる六田の柳 あり桂

お世宗春めく お大豆の汁

其色の料理 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ

兜カブト 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ

咲そめて 兜カブト 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ

お向ハ日枝横川などいふは 兜カブト の 兜カブト 兜カブト 兜カブト

あり 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ

と 兜カブト 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ

ええ 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ 袴ハカマ

附合

三十四

下

三十五

皮<sup>カ</sup>剥<sup>ヒ</sup>の<sup>チ</sup>お<sup>チ</sup>者<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ク</sup>ら<sup>フ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>月</sup>  
か<sup>ハ</sup>は<sup>リ</sup>ま<sup>ア</sup>く<sup>ハ</sup>見<sup>ツ</sup>け<sup>リ</sup>や

片<sup>ハ</sup>一<sup>ツ</sup>の<sup>門</sup>乃<sup>ハ</sup>柱<sup>ノ</sup>お<sup>チ</sup>あ<sup>リ</sup>て

定<sup>メ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>何<sup>レ</sup>も<sup>ハ</sup>入<sup>ル</sup>ニ<sup>シ</sup>テ

二<sup>ツ</sup>句<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>づ<sup>カ</sup>の<sup>家</sup>之<sup>ハ</sup>夕<sup>ノ</sup>ハ<sup>門</sup>の<sup>柱</sup>ふ<sup>ラ</sup>ち<sup>ノ</sup>せ<sup>カ</sup>

い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>ふ<sup>ラ</sup>つ<sup>ル</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>住<sup>ス</sup>居<sup>ル</sup>こ<sup>ノ</sup>ろ<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ

窮<sup>ク</sup>乏<sup>ク</sup>の<sup>お</sup>ち<sup>の</sup>あ<sup>き</sup>定<sup>ニ</sup>お<sup>チ</sup>お<sup>ル</sup>て

も<sup>ノ</sup>ら<sup>フ</sup>ち<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>懼<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ

お<sup>チ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ク</sup>定<sup>ハ</sup>在<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>の<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>げ<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ク</sup>定<sup>ハ</sup>

と<sup>見</sup>て<sup>お</sup>ち<sup>の</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>一<sup>ツ</sup>懼<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>た<sup>ク</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>さ

住<sup>ス</sup>居<sup>ル</sup>を<sup>ツ</sup>け<sup>テ</sup>ら<sup>ス</sup>こ

侍<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>ら<sup>ハ</sup>で<sup>ハ</sup>は<sup>ヤ</sup>り<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ

る<sup>ノ</sup>音<sup>ハ</sup>侍<sup>ノ</sup>あ<sup>ら</sup>た<sup>チ</sup>の<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ

あ<sup>ら</sup>ふ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>侍<sup>ノ</sup>あ<sup>ら</sup>た<sup>チ</sup>の<sup>ハ</sup>命<sup>ヲ</sup>を<sup>カ</sup>し<sup>ム</sup>り

て<sup>侍</sup>あ<sup>ら</sup>た<sup>チ</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>む<sup>シ</sup>く<sup>ハ</sup>時<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ

ぢ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>族<sup>ヲ</sup>を<sup>カ</sup>し<sup>ム</sup>り<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ

い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ

い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ

い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ

い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ

下

三十五

下

三十一

おねたうくわくありとの附合あるべし  
 原一をいばふ下にぬるく、つたのいさ  
 ね織ろろえて、春のよあま  
 美共づらぐ糸まふをなやふ出立たるなり  
 ちれぐ及の草<sup>ソタビ</sup>もあつくたむれゆくはま  
 首の二つとれ<sup>ヨリ</sup>船<sup>ナヒ</sup>のち路  
 幼雪ふ先下の句を出し、りま  
 お句をねふれ下の句と見とて、かくはつた  
 はり、船のち路ふれつけて、放され、るま  
 何れはづ

森は体も別れ、安た、流のき  
 風、仕上し、流のそ、れ才子  
 おハ、流のほり、りふ、おも、ちて、た、め、は、る、ま  
 おく、流のき、れ、つ、せ、り、り、も、別、ま、ば、中、く、安  
 た、もの、あり、と、つ、句、を、詩、人、の、は、ま、と、見、て、流  
 の、そ、れ、才子、と、借、稽、ふ、い、ひ、た、る、よ、や、ふ、く、解  
 き、は、る、り、何、れ、は、  
 僧の<sup>ヒゲ</sup>髪、<sup>ソ</sup>料、は、ま、ま、の、ゆ、よ、ぐ、れ  
 女、ら、何、ソ、心、お、ま、め、く、あり、と、踏、な、て  
 を、こ、な、へ、し、お、ふ、く、は、理、を、こ、も、つ、つ、は、遍、照

下

三十一

の歌乃あろも有りやをみなへーハ女よたと  
へたるいほくーたもの形ゆと踏おらほよき  
僧乃美若れ心ちるべーけて附合ハもまふ  
をみなへーと時それを何ハせ替る候とよま  
なまめくとほふをたるり  
月見お坊ー旅シヤウヅツのねえ来  
はまぐくふ具拾ふころ布代え  
近きつりりの月見たれどわげと旅のねえ来  
ふてりー之れハ其扱の候づこひまらま  
くの具拾ひーたつらむ

豆腐白ひくせるはへきうぬ里の花  
鳥の巣もめと位阿らまを  
お向豆腐さへたきさ花之懐向るの葉も  
りとなりそ阿水たる處ふまむ人清深う  
らやむべきの地  
はどろろ空を身を喜たれたる  
ふまぐたのむたすりの後磨  
何りれたる附向まきう升りた二句の眉に  
ものかきりもつくはべらありむりー総波  
ふるまきま阿り父まねられひとりの母

海  
三十一

此やのひがちあふふたうらうらさへおむく  
て乾々の難もくふたえぐなるよかの共い  
とかちのうねがえうくくるよえたえむやあ  
ゆらむをさきわごりのをれとをたのみく身を  
喜たむとさるふよきんぐふまの難波よてハ又母の  
れもてふせあれはとつひふ室の津ふらうれ  
たるなりはれど母のりれとろよかありてつ  
ゆもえりさるれども思ひまぐまたありれりま  
もして母ふたよりきりせバやと乾なる夕たふ平  
思ひとがはれどはるべたたつとももたうてころ

あふらば目をたぐふふたまへく後魔のふふな  
ふはろとくの共たありとつふうりけかざり  
なくくさまぐくと又かたつはく後魔の  
たのそてれりりたるよとそあハたぐゆるりあ  
たたりぶれるりたれどあれよまむ人のぬむり  
をばまきそのそ  
まよづらうら人平ほごそん  
田をゆきて徳うもなた葉ヨステビトつ  
まづらうまを割ちく絶たものを匠逸  
の僧はえりもるるからば田地など取四

人ふつくらもみづらも田草なごころりてたの  
しめた人ふとりなりたる附合之

赤群くちまをさるる朝顔

あるもかどけくひともこのまの

お白らちつどひて療病神をさるるさほえ

後向け水バ療病も大やり農作もよらぬ

まよてあるもかどけたると

口ろろくと唇中くくはる

赤ぬくりぬ人を思ひひらぬ

お白口ろろくと唇中くくはる人を思ひひらぬ

なる人と見て恋のもた思ひと一なる何日

もあろふ不足なれたるもうちぬてはる

ぬ人ハやごとあきかて叔思ふならむとの附

合あり

ゆままがれ輝<sup>キ</sup>花<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>とく立ゆり

泥うちかりにまて女のば水

お白ハゆまがれまぎれ輝<sup>キ</sup>花<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>とく立ゆり

ふハ細ると見てまて女のたりあれをつける

あり

空のハ鳴ふ鳥守あひつ



傳 奥ハ花より月のはまぐくに

室のハ崎ふまぐふみちのくつつけて一白ハ  
きこえたるまゝなれど月ハひとつ花はま  
ぐたるをいひかへたる彩一とこ

麻<sup>ハ</sup>疹<sup>ミカ</sup>一とこは 初<sup>ハ</sup>のやまはよ

病<sup>ハ</sup>疹<sup>ミカ</sup>一とこは 初<sup>ハ</sup>のやまはよ  
おに定より歌半一てお中をきくとの附合  
あらむらねうらうらうがちまてだたるや

白田の仲ふとある 稲妻

白田の仲ふとある 稲妻

白田の仲ふとある 稲妻  
白田の仲ふとある 稲妻  
白田の仲ふとある 稲妻

煙の中ふおろさて 稲

煙の中ふおろさて 稲  
けつけ合俗のにねた人をぬきさりの花より  
とらふひびたふ毎を論説つける之煙の中に  
とハたどめよ人を繕てまゝ、煙のたふぬち  
千又かの人たや、子桶をもてまゝとこ

新む海（き）の舟（が）のもほとくきん（の）の卒  
 く唱らむ人精細なごの何とゆれとぞに  
 此お不たふの何るものえりてふとくきんを  
 死出のたを何とゆれとゆれとゆれとゆれと  
 梓（アツサ）引（ヨシ）矢の羽乃を何を何とゆれと  
 射するをよめた疾 嘆のま年  
 梓弓ひくよなごのまきりてれど日矢と  
 つまきたる何ハ何りやなりやよ一たのく  
 とも依階ハ新なたるのそあ白軍場と

見くく子（タカ）氏（ツギ）我（ヨシ）身（サダ）などいふ大の軍此也と  
 先仲社（ヲ）は詣り思（ヲ）歎（ゲキ）退（タイ）治（チ）の死出たごのめなは  
 ま之嘆の一字大よちくら何め心なつて  
 いまの樽をさるる若れくら枯  
 梅よ出く幼服や若方理ハ花の体  
 きとえとほまの旅辨之  
 まぶせ盤をいりりるまのうつら  
 かえり一現々の條やねもくた  
 二七（ニ）人（ニ）理（ヲ）を揺（ヨウ）さるり  
 麻（マ）のさるたえくらみふさぬま

附合 下

四十一

冠取も落さざりぬ。位しゆれ

昔白麻の着たえくよめハ赤もなぐ淋き  
まなるべし。たゞ秋より後ハつ小倉を  
後向してハゆゑ何れもくみさぬまゝりてハ  
おと来た人の名もて位しゆれ。ついで  
つけり何のゆゑとつゆハあつた。たゞ  
の越をおぐめり。たゞ  
よもいんせ業種ハ外くけの草  
よ業を共大く。と。たゞ。ゆ。麻の学。寧  
ふ。ま。な。り。

硯法度と。衣や。せり。お。い

秋の面窓北より。なぐ。は。ま。む

昔句硯何水ハ艶書<sup>モム</sup>をどやかくと硯も赤もくこと  
ぬなるべし。後向ハはおがた。ま。ふ。あ。く。な。ぐ  
内むか。く。も。な。く。淋。した。小。秋。の。み。内。一。ふ。り。く  
い。と。と。せ。む。さ。べ。な。り。れ。せ。め。く。ハ。窓。の。方。を  
る。を。き。て。な。り。も。な。ぐ。は。ま。む。と。お。思。ふ  
人の常情<sup>ジョウ</sup>公初<sup>コ</sup>ひとめ<sup>ヒトメ</sup>あれを。し。る  
高。く。小。水。衣。何。げ。る。ハ。お。戸。極  
山鳥のわりは。く。は。志。づ。ん。な。り。

お向のお戸極つらめて暮るる水を新し何げ。  
はま山さ山さのなをて見て山をたづつける  
あらし一何何となくけたるよお向こ

見ぬありの主人は恵を志らぬれ

さぐと半分かくさ、  
金華

お向うちくのまれども人志らぬれぬれぬれ  
るを主人の志りながら志らぬれぬれぬれ  
さぐと之後向ハせて見つけられぬれぬれ  
さぐとをかくしたるあり

息吹ツクサイたよ子者下とにあり

老たのハハハ屋よりおよかとはり

お向もよめ下くのりなれぬれ下くとよび  
たる人ハたど人あらぬと見て引替して附た  
親係の極へ附とるハゆを何めて下くの老  
人の赤子なぞ引つれてやむとあさかてよまの  
あせらはは老人をバゆはれぬれぬれ屋の外ま  
でゆくのぶさうれてみごとバあどたまりの時下  
くハ子ハさそやうなりとねんさらぬれぬれま  
えひく絆らバかくあらむらまことハはまで  
向をさしものよ何らぬ

松山の榎ハ蹴躅の咲りこり  
倍ホイ炉ロ乃山灰を下さ川舟

松山の裾川ふま岸蹴躅の咲りこり舟中を  
倍炉此炭をつてりは舟之春々こまさふ  
画主ふ入倍炉の炭とハ画家も及び  
ふささ海ツキム揺ツキムく洗ふ波も  
船と小恵のあつろを 持さばや

け附句ハ公卿乃名句申くさふ人ハ臆カクイニヤ矣  
さしはくも及びぬどあふいりお白ふきは  
揺く波身を洗ふ人ハまことのあふ人ハあら

をた浮世のみにくくとくおとひ匠のこて月日  
を送ははくめし海りあふ人と見てつける  
ありつけれろいさびらくおきて一句のこころ  
あつばん意の及ぶふよあらざ  
目のたりに先子スハいてやめて  
きゆるばうりに 総ソウおさゆる

目小重腫ヒヤウドウ何は人ハ大ねとあふのカシム意ありと  
うや人をあさるふも船を舟とすとさふさふ  
お白ハかるむつりたるを思ひてつらめた  
は句ハ何らだたコトは目コトのこころ

ふスガものハ何と云ふらん之後向ハるの人  
馬子のりて寝もきぬるさぐりみまのこぐりけ  
いけまききまがごとかふる人あれバこそ目の  
ちりみみスグーてやらめいとけりし  
那智の山乃春まをたて  
らハハめまぐりうてくむまごとも

昔句早春のりたよて世の中ハ春よなめ  
たれども那智の山ハ雪いと白く内らよ春の  
まがともなるといふ句をさらりだめみりやめ  
はけまといふは附合よや

草口之伝小地雪張きた秋のちか

伏見何ぐりの古も居は月

昔句之伝小地雪張きた秋のちか  
伏見何ぐりの古も居は月  
かの古も居は月もまことえ又ハまぐりまのま  
お屋が居張た起くゆくもまごめいづれま  
なむ月とつよけまでのまろなるあはれ  
あはれと月とつよけまの秋とつよまのめく  
の月とつよも何と云ふる之まといふのびたまで  
秋とも月ともまなべ  
目せりと持しもとのまの目

物類

四一

くさやに書ても子やよの筆の海

お向思ひきりくわくや恋之姿見もくハな  
にけせむとてくちやりたれはまなめなふの  
アちくも異はいつありのふみをかくよき此  
がよの筆のふるはいつ附合とくまや  
といつなハ一向のふよてふりきとるを  
弓と矢も海ごいつけよ練まづき  
白紙なけし出さるる屋の何ハせめ  
何りれちの及附向たりまぶをさきた人の  
茶よめきれて弓射るに及の親乃心をくた

糸子のよ糸いりぐならむとい屋の何ハせめより  
け中のぞたて葉づるやうきみつけくる之を  
くつ二字あまく涙も流ぬべし

此既子葉もらりあめりく  
娘を流さく人子何ハせぬ

あれハ炭徳の附合まゝあまふ人のく  
たぶえち存依借之お向の人からハ難きは  
さ見くもあまゝあがらおぼく娘  
もね保たゞく人よも何ハをぬやうよやめて  
ろごつるの附合と

付合

四一

ちうらひをひ回どつらなるは**基**よ

まじりぬれふらぬと月

お向のちうらひをひまは商人の辛久しく儲

廻ワムまはれどもとより**基**よはありぬバ出世も

せむたなド**殺**ある之悔向はたぐまくのなき

をひつりつりよつけりおえあ

ゆけはな味増えよは向海岩

ひくとひ出さるお代えのり

け向つたく人ふきく存るはありけおふ取

つりよふありて又お代えつりつりいづくをらむ

とおねたづぬるよおのいハくお代えよりなるよた

りあらばかよも一かぐくハけ巻の見え

やしくけけといつりよさむべ一何ゆべ

おねの依借をさげは**海**の**流**を擇ユクげん

といむりけりおれりといれむよりとよといふな

といふも依借の重をかりけりをえらげ

ものハたけり念のえたりめて依借のま娘に

あらげるるをえらだおのこのまをばを伸ひふ

記まべ一附えはきくえたるはゆへ

ヨモスガフ  
おねの持取をたさえは

附給

下

百廿二



草コム 花ハナ 名 月

名月ハ人ハく 極のこものこひしう 秋をくら月  
をながめあろびし 小ひしり尼の持病を押え  
おて月も見ぢりし 此の附合あらむや  
ゆアハみかりけ下地おぬく見は  
雨露をおよに 居合一ぬた  
ゆアハみかりけ下地おぬく見は  
下にけのこあろびし ちんどもハ 花アとあき  
おははちんが 秋見るといむすかハ びたよ  
はべしきべて 句をつらふ けん けき 尊なるべ

附合ハる中のけぬく 居合ぬきの節くら  
居合ぬくとしやめ之 立派をおよめといふ甚  
斎之は びりたり ちたもの 秋が びりたり  
たもの およみ けを ちた 名人の け ぬく  
を

所 花のつらりと 碎く 花の伝  
いづ 押 おく 土生ニの念仏  
おちんふ 雲の けを 吹迫し

けづめの 句ハ 所 花の け け 立て 花 尺 びりて  
つらりと 碎 ちた けと けを 中の 句 まで ハ 土 生

の念仏ふまゝありたるとつけける之様の句は  
猶どく薫桶をひくちとけふゆくたま  
ちれ附合の清経  
くぐ居る海ふ 朧カイトわづらふ  
江戸の右左むらひの真まねならぬ  
お向座をな人のとく 疾がちなはちま  
後向るの人に江戸のかりぬる人と見て  
疾何れバ丁はちのま きたむらひのま  
まねむり来てはてはちのま けに江戸乃  
おがくりまゝの附合なるべた

まぢももの小どから 白カイト代尺  
方くに才敷のゆ乃 陸のちる  
京の小家位のありはななるべ  
桐の木高く 月さゆるく  
門めてだまつて海なる面ふは  
庭の桐の木は月のちゆるまをひり居  
と見て門めてさるくら海なるなる安  
内をつかり  
ひらりつとてまぬがへさる  
おと十は廿三の親子 松をく

附合

附合

も負者のたはしくと重をひらひてよごれたるを  
をぬらへ世の親子に馳せしあぐてまき  
わたりけりたはちよきあれも又人情の附  
合をとりたり  
まぐけ春もまはぬ人  
法不の河沿を送る花づり  
たど何とつゆりもなれた附合たるべし何  
やうにたぬかたよえお向ハゆえありて人  
したる人のけ春もはまぐまきだ法不あどの  
せよちりてあるとの附合なるべし

どの家も車の方には定を何ハ  
奥にくひ何く候のガウ スイ

お向ハ浦をの片がハ町まぐどの家も車向の  
定を何けくは之候向ハみやこわたり人乃浦  
をに滞るしと強飲も奥をのりなを  
ひくちどめはめづらとめでくひたれどくく  
ひ何たるとは附合あるり  
ふなる時一歌くはきくあり  
まぐの直乃 果ぬい用  
お向ハけたく優艶あよけしきあを

附合 下

後句川橋くわいく世居のふりにありあり未を扶  
母子の真用此時分をつかきり  
隣一も志らせさで嫁衣速てまで  
屏風のかげふり見ゆる菓子多量

け二句ふ人懐世態をつくさりとつべし  
位のもたなごの儀一も志らせだまつり  
をつれて来るる之後句ハ家あご阿やす  
みて料理あご来るるを儀をふの人何  
あらむとけしのぞけバ屏風にまりたるが  
に菓子多量の見ゆるふけてハこむ増かりて阿ゆ

よとけやく内ゆ之公の隠逸の身みてかきり  
ゆぐをみつけれハつぷりたる之をば  
依借ハ才一人懐世態ふりばありけ  
りなきしたるたひ出なるかきり  
妹をよいふらもらりけ

僧歌のもと一丈文衣やれ  
あれも又人懐世態をつきめきづく炭徳の依  
借ハ世りたつありをさけたりハく縁ハ  
もつらけり一妹衣思ひの外ふよふらもら  
くきぞお後きハまれば先くけりハ任又坊

の借於きくまきふもと一又かきくろののりを  
ちらさちるもの附さるあり

家のちがれく縁を見あり  
縁トギ汁ジわりいものすりよる形りて

ちれも又ぬ乃附合なきお向ハ大水の何と見て  
縁の尻山ありふ縁汁たきく皆ちくらま  
なきるれ中耳を者れ老人何りてい恙い者あり  
よくとひいとつふをみえいであかげむたふ家  
の縁水と縁を見にゆむとつれどちゆくとのつ  
合ちるべー

雪の縁吹たぎたは 縁月

ふとむ丸げくお思ひお頼

お向は雪の降つたは縁春風の吹ぬれ  
月の縁くとけくはねいとも思ひ  
からむといが詩人のさよひくべーやうたなどふ  
とむの上み孫もつらだりりなくお思ひを付  
たより

えつち 城をよと一何がらせ

位りれひろくふあまー海ぢふに

ちれも何と空のくぬりハあちきごやうさ

阿のりげふ附たは之終てとかが位子のひろくも  
 来し人のあつめたるあふりいどゆえ阿  
 ましくまづい人も昔だる之かはかき一たお  
 りらハあふ人のあつりしててつち付まの念  
 仏さへたつておのえとへ阿がうせく飯を  
 くハせたりといふ附合のや  
 今子ムの君に雪の阿つ片をけし  
 年子ム責ガえ海ごとほめらぬ小ル里  
 秋も冬もハや雪ふんは氷をのる性  
 どもぐま首もさきま一雪の阿へをも一早

て阿そびぬよの附合之あふ雪ハ豊年  
 ぬといふ厚あるをもあつめり  
 堪カム忍ニム心あらぬ七夕の恋  
 名月のるに阿いせとた草をけ  
 阿まりものよたふ成堪忍ならぬほどよた  
 ひとよは浪阿り七夕の日和れよたといふ向  
 な里附向け阿りよてハ草のむまハいぐなら  
 むいふよも一各月のるに阿いせとたのま  
 ころあり  
 晒サウのくへりやう薩さへづ

と化見ふと女子たぐりけ 遠く

大和路をどのたぐりけ 晒物ゆく河を之焚る

りけまき落のさづる 春のけ だ女たぐりけ 兵

ちりへもちりけ 化見ふけ だゆきまき

好おの餅成たやけぬ秋の風

刻本乃安た 玉のやけも

二句の百にたぐりけ だ世終まるとふ解つる

だくらげ餅をたやけぬくふてぬる人をも

の驍者と見てけ だ刻本の安た玉のけ

よいとまきめりたると

くハ玉の干茶刻むもくハの

馬に出ぬ日ハ内く 意ま

お向の位をりんとく 附合のさる

内ハ餅乃くハ玉のけ 茶まきむハ

驍者とのまきめりて 馬くの

まのけり

餅小門の秋 五十石

け 嶋の結鬼もまきをさる月と花

小園をどの五十五のうけ だけ

て門がまへもたごうふつらりけ

五十一

五十三

後七刀をがけらせた歌なるべし  
けしは後句ふ  
てハ時位ゴウミの仕シあど見えてはと  
ふけ時の際思  
畜ウ生ままでもよきをまじく  
ねとたをたけとあり  
月と花とつねにあつるは  
あまのりぞ附ぞるは  
ものあて一向のねもてハ  
月花の何りれは  
あまた思オモ仲もほならむと  
一向のあつる  
づろとあつるさ  
あまのりぞ何りぞあびてを  
ぞ

川越の常一は水を何ぶるが  
平地乃寺はうきた最壇

糸向川越ふわと  
舟フネ子常一まで水の何  
何ぶるがは之後向ハ  
たぐる中ふ何へ  
きさ  
塩出さ鴨カモのツト老オシ何トづく

舟用ふ浮世をえ立て  
京住居  
お白ハおあるより  
北到來ものえま  
とふめづ  
ら  
と  
川カハ何トたた  
るハ舟フネ子コ浮世をえ  
た  
新ニからた京の住居  
あまのりぞ何りぞあびてを  
る附合之

中よくて侍穿合の借わらひ  
忍古をたといく  
森さぬ名月



お向ごとくつゆのハなる水どたそ一ハに戸後  
の長屋位なごし是ぞ侍家合の忍辱も  
めハなるたるえなるしきる成かりわらひする  
あるは向ハるの忍辱をたいて孫あくとけ  
めくさはえ  
狸の鳴子乃 従をひりぬる  
ちとらぬらと玉の拍場のけ度め  
御イケスの狸小鳴子たつけくさる鳥をふきぐ  
か体不を舞え舞の候と見て玉の拍場のけ  
くひまげさばまをつけり

きのふくら日なりたる月の影  
狗ガム脊イかきくく 糸きくくなるは  
おえなる  
縁が縁とほ 社又の借跡  
狐指はかへく同いよ 籠刀  
お向を軽き侍の内まき見くつけたる之縁  
泣をつがきく借跡のかく付をもけさなる  
べしけ向ハたご 社又の何と 縁縁がとはつゆ  
あれぞ借跡といつゆく 借跡のをくみなる  
ちり後向刀 狐指のゆりなつて侍の子は

やうすなまきるせかつほしむらゝのく線の手  
のをききたたきらきる附合之  
世乃美菜に小孫控ておをしるた  
何ははうつちのと門のち付  
兼白志もたも義植の家まで小孫のいと袂け  
まば双方より世の美菜乃志より何ひて小孫の  
海らぬほごたあふがおをしるつとつを控  
者の片はと見てるの小孫乃家に臣若のまふ  
頼が門のひくくはは何は海らつちのとち付てお  
はりま何はまぐくあふすゆくた俺は臣若をひ

ぞれた  
やうとす出立京の道連  
有明にたぐり花乃たはひて  
京のがりたなきをやつてす出立て  
お立頼乃け一た之は三月申のあふ  
も持ふ小孫の仲るるはくと  
くらりとて乃晴新書  
小孫仲るはも持あふらつては頼よりあは  
ろつたてあふすもとあは日知なりーが見ひの  
おふどららわと晴てまてにたのりたるをよる

あぶらごといふ附合あり  
根ネの角乃たてぬ 貫六

淡出ニの牛小 徳をはさむるなり

ろろら何れりれり たらむり

むれく来て栗も 榎もむくの産

伴僧ニ 執事おの 紙

切ふをよくり見つけたる 附合あり 栗も榎も

むく鳥のもたけ 何れり山さる 或へ大さうといふ

こそそのさ乃と人れ 兼おののりて 出たや

りるがぬ

はぶらごといふ 附合あり

引立てむり子 兼おののりて 出たや

茶臼 兼おののりて 出たや

海ぬ 兼おののりて 出たや

とまのめり 兼おののりて 出たや

あひが 兼おののりて 出たや

けりく 兼おののりて 出たや

後り 兼おののりて 出たや

わりの 兼おののりて 出たや

わりの 兼おののりて 出たや

那きバめであううさひ舞うぐも何らぬともと  
より名をたのみ人なる小片へたをやらた  
ましくかの陸軍軍校<sup>ギョウ</sup>にみよくせ秩那の輝  
にまほせくは付なり  
ふ血仕と舞一なるであまき足短の奥まよひ  
臣那の輝をあらかぬりり  
依の人情は付合なり思ひの御みむをば舞も  
よくと舞の舞も一なるであまき足男をつね  
ハ臣那の輝をあらかぬりりがちなり  
かき流すり思ひたれり高きたみ花せ

臣那もよらぬると思ひてあろを何らた  
むるとつらうろをあらかぬりり  
てまきたる舞をば

中国よりけ 状の者た大

昨日の日にとて一やらある舞は  
あはれめでた人の男はとてたへ大坂何ら  
の舞もちたるとるぐみあはまりあはよあよ  
りもかこよりもまたこのさひあはるこ  
あふくわくいつぐり代々の舞は家みハ  
何らでちうどろより何とせ舞のくはよら

く出世したる人のりも何れも人よもてな  
けいしく又もや中玉よりの状もめでたなり  
をひあしたるちりかくとたてハ附向の茶  
後たがひたれやちあれどまてて附向の茶  
一く見ゆるる何れあろたてたくべし  
とすはむどれまゑの路乃 モミ 柳 カシテ

山小門何る有ぬの月

柳柳の中小門なり及ぬるハ寺よや何れむ  
まよや何れむと月影小見や何れなるよの附  
合あり

水際あり敷演の小いわし  
見よ通体絶三井ハ是れ此 笑し 星  
あゝと云なり

あぢ風の又西小なり 小小なり  
わがも小 緑をとりて から 海

あれも名高たあれの附合ちり星あ白ま  
風の西小なり 小小なり 何れなるつあゝ万も  
あぢけしきなるにそのとをさうくさる人  
あゝつぐみの緑をとりてまや キ 柳 キ 小なり  
あゝせまが た とつ し むれま 之 ちを た て ぬ れ

の定らば風の吹くつら人のつらもはごぼら  
きお思ひたものこころ疾く時々の言ふより  
うらはものまじく風は百病の基といへるもろの志  
とわめ之がもよみをふくみくいつはまはあらぬ  
どついでよひひの

喧嘩の御法もむげとせらぬ  
大切なりが二日あるも善の障

け句や涙流ぬべし大切なりが二日あるといふ  
母の余ぬたをよをり善の障といふは又文字  
を打入位むむ父母をまじくよの障は又文字

ふゆらけし入おの障をまじくよも尹が意し  
たよよみたまへるさうろ之父母のつよをまじく  
まばたのれが力をもりしむたつらひ喧嘩は  
論なりがみかりよもたち何しぬ茶子の情か  
しむべしむげくべし依借をたりしれりとな  
思ひろが親向ひひどりのふみのものをまじく  
此さらぬけらむりれどたまをくらであの附句  
をま親人や何るまじく若葉おきまか  
まはふどのまふけは皆出原が流

翼の世並に色まの化

けまうけハ奥州より恒安子京へのびる出家  
ならむりか小がえなりし典皇孫のりをいひ  
たさる

赤鷲渡成庭の正面

さくらぬ娘のあさるふ志づ矢  
ち小も公の名をたけ付向ふて人のよくしむ  
向ちゆりつけごろぬとやいむ言ふもいむ  
たさる庭にものありしはまづくに思ひみぢれ  
は娘のつひふはとるとり志づめたはハ白太の産  
おみひしりぬく小庭の赤鷲渡ふむて

あつらむあふろのぬをさむとまほし口吐に  
鳥の籠をつらりとたさる松の風

大工づらひのゑにまきゆれ

お向まのりしたるて学物をもけげめ  
はまづく乃小を籠をつらりとたさる人合  
しつらぬ宿とりてゑ太ふまのり大工づらひ  
乃まきゆゆるゆゆるなるは内まをつけり  
米搗もりまはしとくゆるこ  
から身で市の中をたし合  
はきたさるなりや

月夜の雪もふりよる雪のうら  
志まふくく跡をわけのなるた  
附ぐろきた日も一日なるふ出く志まふて  
ろしく跡をりける及中のらま  
女鳥トビで工夫たしたる思障  
お水がりの可によまはく橋の番  
お向女おむこの意日ハかたうらぶよた日私をり  
もことしり之後向ろの人を橋さに見つけ  
たるハ係の公おれ人を尋るをふく橋さか

をこがほした男よてお水をいやしきもの  
思ひひろお水がりのハ何の橋さどこの橋さ  
どこの可もよはゆるがとたより人ふねころ  
ま之にてハ女で日私の工夫をも志くらし  
馬をなごく娘ひねお月おつきの糸  
尾張でつぎしもとの名ふなる  
いりたるは附ぐろるや  
お水がりの村へぬけるまふ  
お水がりの男も男もいり  
石世家の一村よて家も古く田畑もち

舟合

舟合



金も何れも村中に口きく男之ろれが来る  
 ちよふり村へ出るまゝる何り  
 心せむを構ふつける 狭いお  
 願こはてる。卯月朧の末  
 毎若ハ何をらむるがのけしき見ふぢ  
 ー  
 是がへの分を舟一にける  
 射付し舟おまゝは月のくれ  
 お向ハ船つきのにまきて同屋をぐつふ家  
 滞りしてぬる高人の志の津乃用るを仕

おーだい又く舟小葉にみくおの津子  
 ゆく人ちりばえ忌がへの分を舟一にけし  
 ちよふりー後向ハかゝるふ射付しみおの  
 ぬえりり来たる之はごめて志ろくぬ入る  
 ふおおあらむ  
 二舟の會はるかは射れきた  
 甘至だいの司すの同りもまり侍  
 くららくとさるまほものをすまや  
 かいらがゆれば 法教 来就  
 二舟の會はるまゝは射れつてもまゝまもの

なほべしうハ何グー夏のホキ云よてらるに  
人々のおろくつでハせたるに甚心目の君ハ  
まぶくひつしり侍の居りたる之は水バす  
こくは時勢の大もたえづくみありてハ  
き死との附合之ふくしけバ其ハは時勢ハ  
むたといふ人ハ可の會ふつらありたる人ハ  
ぞろの人くみまぶひて主人をまちぬる  
侍のいふあましつてつけくる之はうくとめり  
附るるを引おどくたぐ武士の大屋おと  
見くつて甚心目の君も侍のつめぬるみ真を

の何くりふてくらしくとるまはるものあり何  
きなるものぞ見くまぬれと甚心目の君ハ  
執侍人なるまじくしれぬてまゆはまに  
つけりる瓦の白ハたぐくらしくといふあり  
手はらをつけたる一辨之は水バあれもさな  
どの著讀いまごころハでかりらのまをた  
なまちぬるまらぐりぐらしくとたぬるま  
すても瓦のや何らむと思つて人情をつけり  
髪を散たやうく見えまへる顔  
産あふハ打つける著るの月

附合  
下

三十五

古今和歌集  
卷之五

五十五

撰 徹 ぎぬきり角力たの帯

二の白何りのまゝたれどをうた附白之  
巻く小人の阿ひてたりよ志水の人や風  
まをかくちたがひたもやうまてうれし心志と  
けりかくたふをたぬに針つけくそれはまを  
とふ志水の人よくたがぬは法新の人たあし  
がくハ短衣短ハやしておくる之はてとを路  
たふははちまよーたり後の白ハ角力たの帯  
たよせく帯たをどつくらせく阿てある俵ケリカク  
の志水よてをたぬくハ針つけけるやうまて

たあやう照るるうたふよりあてつアたり  
秋明の星乃まごひとつ有

内 供ヒタキ糸ヒタキ 花とろ

白 いつとどふぬの飛りり

まごおも照きうでや不のぐらく星もひとつ  
あつとあるはより嵐山たのの花見まを  
いとひそやう小物さあふは供ヒタキハた供ヒタキ  
まぬりぬともよぬきたものとなれはあうと  
びていきみゆーとつ小附合之のちた白たごろ  
こらのやうたなまもるごがてふは花ハまごろ

古今和歌集  
卷之五

五十六

うりたうんてつどはる白おきーろくきた  
やうはらまうきさめ  
手紙のをもつてく人の名をとふ  
本儀がゆいバたのくかごあり  
とまを器しーく殊をつてま  
ちづめの白は附ごるふまうけしてたの  
く本儀ふかとはる耐そのふおとよある  
るをしりておより用ふけよぬのをた  
せく心取<sup>キヤジ</sup>仕たのどまのもち出て何某  
具とらづれお具ふまうと名をゆふとて附

合たり後白ハかの本儀乃らハ内のおろび  
りしてよろづお大たなはままをくづて  
殊をたびしーくつておける之かつまのまのや  
うにるるーくらぬ者と見てつけり  
お風のむむくと吹お羊道  
ま〜くみがあるときは門ま  
附ごるやうち白きりお風むむくと吹てお  
まはまうたお申さよ門おに子をまてゆか  
しなごうーさるをつまのまいつけくある  
トの家をたつたおとまはまたあり

六十一

六十二

馬一正小 海を能くける

小でつちの時くら居るを公人

痛<sup>ツッ</sup>がたけきバ甘房もつ

二の句ほきあつたの 後の句ハ階<sup>ツ</sup>階<sup>ツ</sup>之

小でつちの時くら居る男なるは

家などもせ甘房をもたさふ之はきバ

かゝりでもたなく痛もたなくお夜<sup>ツ</sup>の男なりと

ハ甘房もつ人のことバ<sup>ツ</sup>形<sup>ツ</sup>よ<sup>ツ</sup>べ<sup>ツ</sup>

何の構うら 虹柱がたつ

二の丸乃光がやぐし<sup>ツ</sup>壁屏風

るもあがつく ほむの 類日

大木の構より 虹柱乃たつふハ<sup>ツ</sup>棟<sup>ツ</sup>中のはま

見く二の丸ハ<sup>ツ</sup>壁<sup>ツ</sup>屏<sup>ツ</sup>風<sup>ツ</sup>なりと光がやぐ<sup>ツ</sup>待

搦<sup>ツ</sup>たふは<sup>ツ</sup>館<sup>ツ</sup>をつけり二の丸三の丸なりと

く<sup>ツ</sup>館<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>名<sup>ツ</sup>取<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>つ<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>諸<sup>ツ</sup>侯<sup>ツ</sup>乃<sup>ツ</sup>屋<sup>ツ</sup>敷<sup>ツ</sup>も<sup>ツ</sup>何

軒<sup>ツ</sup>より<sup>ツ</sup>之<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>ち<sup>ツ</sup>は<sup>ツ</sup>向<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>穴<sup>ツ</sup>館<sup>ツ</sup>なり<sup>ツ</sup>バ<sup>ツ</sup>下<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>り

つ<sup>ツ</sup>ろ<sup>ツ</sup>ひ<sup>ツ</sup>て<sup>ツ</sup>館<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>掃<sup>ツ</sup>除<sup>ツ</sup>など<sup>ツ</sup>奇<sup>ツ</sup>麗<sup>ツ</sup>なる<sup>ツ</sup>之<sup>ツ</sup>徳<sup>ツ</sup>侍

の<sup>ツ</sup>登<sup>ツ</sup>城<sup>ツ</sup>する<sup>ツ</sup>館<sup>ツ</sup>なり<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>あり<sup>ツ</sup>る<sup>ツ</sup>も<sup>ツ</sup>何<sup>ツ</sup>が<sup>ツ</sup>つ<sup>ツ</sup>て<sup>ツ</sup>い<sup>ツ</sup>ハ

は<sup>ツ</sup>ふ<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>壁<sup>ツ</sup>屏<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>影<sup>ツ</sup>日<sup>ツ</sup>ふ<sup>ツ</sup>つ<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>光<sup>ツ</sup>が<sup>ツ</sup>や<sup>ツ</sup>ぐ<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>い<sup>ツ</sup>ハ

と<sup>ツ</sup>ゆ<sup>ツ</sup>か<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>昔<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>句<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>い<sup>ツ</sup>う<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>附<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>一<sup>ツ</sup>後<sup>ツ</sup>句<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>心

はるまじお向をりしもあらもまらるゝえちのれ  
はまのこしはる

松風海つゝ庭の立籠

軍書おぐりりのまぐり何れはづれの軍  
ふおさささかぬちぎりさ女のもとに  
わうれを告ふおありはるの軍よはれづめ  
て討死さべりれづあさび何れかたのさ  
きおのど涙ちがらふものがくめはるえちの  
ふはまえまてよろの女乃もとよりお具足

て立出はし境の流をバかの女に後ハせたるあり  
はるばるにかさなるはるはるはるはるはるはる  
はるはるはるはる

はるまじくふえの馬刀具立具

とくるとはるはるはるはるはるはるはるはるはる  
お向いたるひのべたるはるの向ふはるはるはる  
るをけまて後向川にたはると思ひの外はる  
をつけはるはるはるはるはるはるはるはるはる  
からぬ人の恵の何やまちよりのはるまじくはるはる  
ひまつひふとくるとまてなめてもとよみはるはる

あつろつねまうへぬせつなは中之内あぐふとあ  
向ふいひあらべたるをいろくのうきまのあひ  
たるものしにさるり

喧嘩の中をむめに川のけ  
仕合と矢櫓乃舟をのらなむぶ  
附合矢櫓の乗場乃喧嘩と見とほ之を  
へばり六風船いげしりしが船出さ海とといひ  
いや出さしとさうぢめいひつものりて喧嘩しなめ  
たるをりよゼムテウあうらぬ日と思ひくつひに  
舟もものらば喧嘩の中をおりけりてゆじ

が何とよききけり大櫓の舟は風船も損して  
人もけがしたりあぢきくは内とくは赤は仕合  
なるものなりとあつろつねまの公のつげ向  
い向ふがざりあぢきをふくめり  
せめくと位子をいガせふつきすえて  
大工屋松屋乃 内敷き  
内大工も東屋松屋も東はいろがけ位  
子をいせふつきすえくを在ふのあぢき  
るべ

一里の船も後のさたたる

舟合下

山ハ皆蜜柑ミカンのさくら黄キナの成なりく

け句 蓼太ルが芭蕉句解ハヤシに才三サイしうしうと登句  
み何らだといひしを伴賀の相あひまみみが蜜柑の  
さことしふ葉は枝え出いして附合つがひのうちれ句くを  
るるを何なにしにのちるちるたがあて今いまここみ出  
ささしうしうかけりるるたがた君きみ子こなりはれどは  
句くもと附合つがひの句くあるるををみみた句くもささららに  
あるる之これがこれささららハ外ほかの句くふも何なにりなるるや  
三さんもささらられれるるささらら何なにりるむむねねづづるる  
ともふふ更さら葉はの何なにらそそひひなりりりり附つぐぐるる

山松さんそうより山松さんそう一里いちりのりくりくよよて舟ふね中なかより具  
やりたはけいたいたつつ後のちのささききくくるととふ  
ふ蜜柑ミカンとつつけるるひひだだ之これ  
先ま度の風かぜに人ひと死しががああるる

水みづくさたふ日ひささたた粥かゆ喰くうう  
ああれれののささききぐぐよよつつけけるる一いち餅もち之これつつぬぬに  
ささららののままぬぬるる之これ大おほ風かぜふふ家いえももくくづづれれた  
びびくくたた人ひと死しふふ日ひのの葬まうれれののささららままぐぐああるる  
ととななりり

粥かゆにに々々ハハささららよよははかかいいせせ浪なみ



か<sup>カ</sup>減<sup>ゲム</sup>の甘茶志つりりとのむ

あれも係の人情世態なりし室記のえまりに  
あろづりて<sup>シヤクキ</sup>積<sup>キ</sup>氣をなやめの人と見え  
かせ記のふれもいしくほくとをるごりたる  
げやしくとささるゆりたるあゆりかはるのこ  
乃人の手申茶のむらさくことふえりあり  
上を忌てうこらをちそふ<sup>鼻茶</sup>

桶<sup>ケ</sup>な入<sup>カ</sup>敷<sup>キ</sup> 巾着<sup>ケ</sup>の<sup>ケ</sup>添<sup>キ</sup>

町<sup>チ</sup>志<sup>シ</sup>ぢのやうを見<sup>ミ</sup>る<sup>ル</sup>がめし上下の上<sup>ウ</sup>さ<sup>サ</sup>り  
とえく<sup>ト</sup>近<sup>チ</sup>ふ<sup>フ</sup>の人乃<sup>ノ</sup>草<sup>クサ</sup>茶<sup>チヤ</sup>を<sup>ヲ</sup>ち<sup>チ</sup>そ<sup>ソ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>つ<sup>ツ</sup>る<sup>ル</sup>之  
後<sup>ノチ</sup>向<sup>ムカ</sup>ま<sup>マ</sup>ろ<sup>ロ</sup>こ<sup>コ</sup>ら<sup>ラ</sup>の<sup>ノ</sup>場<sup>バ</sup>ふ<sup>フ</sup>く<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>何<sup>ナニ</sup>が<sup>ガ</sup>一<sup>ヒト</sup>層<sup>ソウ</sup>の  
出<sup>デ</sup>通<sup>ツウ</sup>り<sup>リ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>て<sup>テ</sup>家<sup>イ</sup>く<sup>ク</sup>ふ<sup>フ</sup>手<sup>テ</sup>桶<sup>ケ</sup>を<sup>ヲ</sup>出<sup>デ</sup>し<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>が<sup>ガ</sup>後<sup>ノチ</sup>ふ  
て<sup>テ</sup>入<sup>イ</sup>る<sup>ル</sup>は<sup>ハ</sup>ま<sup>マ</sup>之<sup>シ</sup>

黒<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>高<sup>タカ</sup>た<sup>タ</sup>櫻<sup>オウ</sup>の<sup>ノ</sup>本<sup>ホン</sup>乃<sup>ノ</sup>本<sup>ホン</sup>也

月<sup>ツキ</sup>の<sup>ノ</sup>化<sup>カ</sup>ふ<sup>フ</sup>ち<sup>チ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>は<sup>ハ</sup>き<sup>キ</sup>門<sup>カド</sup>を<sup>ヲ</sup>出<sup>デ</sup>ッ<sup>ッ</sup>入<sup>イ</sup>ッ<sup>ッ</sup>

茶<sup>チヤ</sup>白<sup>ハク</sup>の<sup>ノ</sup>櫻<sup>オウ</sup>の<sup>ノ</sup>本<sup>ホン</sup>は<sup>ハ</sup>茶<sup>チヤ</sup>乃<sup>ノ</sup>黒<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>高<sup>タカ</sup>た<sup>タ</sup>は<sup>ハ</sup>茶<sup>チヤ</sup>  
寺<sup>テラ</sup>り<sup>リ</sup>或<sup>シ</sup>ハ<sup>ハ</sup>赤<sup>セキ</sup>茶<sup>チヤ</sup>と<sup>ト</sup>見<sup>ミ</sup>る<sup>ル</sup>大<sup>ダイ</sup>門<sup>カド</sup>は<sup>ハ</sup>た<sup>タ</sup>く<sup>ク</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>だ<sup>ダ</sup>て  
小<sup>コ</sup>つ<sup>ツ</sup>り<sup>リ</sup>人<sup>ヒト</sup>の<sup>ノ</sup>出<sup>デ</sup>入<sup>イ</sup>ま<sup>マ</sup>は<sup>ハ</sup>月<sup>ツキ</sup>の<sup>ノ</sup>花<sup>ハナ</sup>の<sup>ノ</sup>体<sup>タイ</sup>と<sup>ト</sup>の  
附<sup>ツケ</sup>合<sup>カ</sup>ち<sup>チ</sup>の<sup>ノ</sup>べ<sup>ベ</sup>ー

附<sup>ツケ</sup>合<sup>カ</sup>ち<sup>チ</sup>の<sup>ノ</sup>べ<sup>ベ</sup>ー

新茶のかげ乃ほつとく東伝

醫者に内一丸のりて長むなりをてみる意

小僕のみより新茶の味。三月末の日に皇の八

つたなるべし。うちの内へも中よた醫者よてと

もふうちかさらひ新茶をどおしくもてなれよ

ろの白ひれつとまきふ之

雪の一層むな降つ

田樂

どかりて志むと。たるには次よ田樂やきて

匠のむあらむ

手拭狭くおろき牛の角

川に一つ海でききたるの平

お向おちりわりのはま之手拭を頬ホウかがり

といふものして牛をまきゆぐの角おたはるは

手拭をとり。あり後向ふてハ牛まきて川を

わらうははる角。かへたるはまし。たるを

めよといふて新のり。たもこや

方。一醫者を入る。おきるの月

角の他。法。後。も。お。不。え。ん

新茶

七十三

か四つこのにくら寺の昔法一とく  
ほじめの句乃あるよまていたやりむしの醫者ぞ  
るとふもあつものもいたりゆくさぐさなれど後句  
よてハ著るの月とつふより 誦の他法を知るもの  
なれたゆゑあるやまを醫者を行きりけ  
て誦の他法をきくは法に附くへたる階格  
なり公おの句形ゆくは格之お句いたや法醫  
者あるは法なる醫者にとりかへたるさくら  
たありとの誦を又のちの句おていさの昔  
法の誦ふ一たり

ほーが法ものふと菊をやらは  
葉<sup>ヨモギ</sup>生ふを止める 男かぶり  
わりり一時に名なきたいらふのまききく  
たをのとなりーごつあふどずり思ひへて  
きくるとふまいつゆたちまぐらハ法葉生の儀た  
は者ふかしくして菊をつくりてたのめふ人の  
もとより世の中れりしはかなりーまふあれて  
何くまで思ひえなれはあはほり法ものま  
つゆをーまぐさ菊をゆくりとふの附くるなる  
をた

舟  
下  
五十四

濕シツの子た出のかちた 南風

丹波くらはもちあきて啼鳥

詠ふふしわづらひく吉園を志すよ人情な  
らむ啼鳥とつふぞ眼なる

その季子が来れど利とさへせぬ

雪ふ出くちカハ悪業を退ちらし

ふえなる

只五中に月がけえらる

沖鳴のひつりりくくハ海はもなれ

其歌の有りはまる五中よハた月けえて沖鳴

の一季もきこゆるきこえぬうふて稲妻のひつりり  
一たはまきけハた月がけえらるえたごとく  
字はよくひびうせり

志や〜りガヤして 志が煙るなる

奥の院をづく花をけいのぞた

たくの院へ十八丁むりよぢたぬる途中むりよ  
と志や〜りガヤしてあろりけり〜がつひや  
みく〜気が煙るなり〜とあざり奥の院ハ何  
となくそらたろろ〜げなるものなりをづ  
くけ〜のぞ〜といふ附ごるならむ

春日の日に産家の伽乃つらめと  
かひわぐや 湯漬くふらむ

よく世態をつらむる句あり春日の日は  
くしきん姉妹など立ち入り入かりり産家の  
の伽をいぬるに一度ふもわらふるもあらば  
たよりにすめぬなるべし

いろぐく皆殿立をいび  
目つらも何れぞや陣あり

お白を指傷の出立と見くつけくる之  
面ひたる櫛 林に日がく

佛の本地をつくむるおとく

いづちを依附ぐるみや  
さるくとい換出をばわらきん

るぐるみよのたるゆる 巾着

郊外の居た住徒たる内ま之巾着に茶のハ  
ゆる宿みふらくとい換出さむほくぎんも  
お不うはべしなくよく不をさ之めく附向をす  
る

羽二重の赤づる色にお思ひ  
わらいはくら 沖せりり

御合

下

昔白く長くお思ひまね人をたといへり何  
 ながちお二重ふあくるあふれどろれ送べた人乃  
 けまをいふ之後白にやりり其人ふてお思ひといふ  
 けいけいけいけ人あた時よりおせりまね人  
 なるばまゝしてお思ひの何る時ハなるはらけ  
 をたのまむと之おせりけいけいけいけいけい  
 するにもおだのまね人をいふ後之

詔を又ぬきま水一けけの月

白田ハ何れく山暮乃ツ花

町ハつ水あふと小田地ねなくもちて詔何まご個ふ

人々見ての附白あめり

日又へたむかす下さ秋の次

くれづくたのむ才のこり

夕風よ蕭生の家も野水行

ゆを何りて才を日光のゆりりたねへたのみ  
 下さ之のちれ白いろのわけをいふあふりあふ  
 蕭生れ家といふを蕭生性の家もたえと  
 いふのれきとせく夕風よかまうと志をり  
 をつけたる他之白意は度はるゆ意何りて  
 蕭生の家もゆりりくるよりくれづくも才

のりをたのむといひやりたるころ之夕風小の  
るふ字所りかごとそ  
花の何よりちい壁山をぶらつきて  
るくれり、敷 黒谷の陸  
前白花の何よりかぎりハルハ暖味くハ東山  
と日く小壁山をかけ何よりくはま之後白ハ  
はまをまぐにつける之れりハ黒谷とひ  
たうくいひかたりんをつくべ  
寒はくはせ糸の下を吹立く  
石所なるハ無縁さの陸

淋しそのかぎりをつくしたる附白之大病の  
人の介抱をしく茶葉ト水たりりなどおし  
も冬の日たれいとまきし病人のと何らむかく  
何らむと葉トぬるふ小陸の茶はきさゆ  
るもおさぐくもや毎夜は生るよてはる  
ゆはまきたなどにはまぐ小思ひわづらよはま  
呼かへせどもまけぬ 小徑  
糸をた隣の朝茶のそ何よて  
糸の匂をぬたうれりたし見く 儀をふの  
むつゆとたふたがひに糸茶をのそ何よはま

附白

三十一

ちりり集まの小櫻をまきりふまゝ待をとも  
どはあきふまぐく浦ちりりの里とみちの

塔 漢ふりつゝきたは音の月

と無任平 ちりり 寺のいりひ

前句 塔 漢ふりつゝきたは音の月

えたはふまよひ音よりたれて月も懐なす

ぐく寺はつれ何よりよて住持のなれりて後

ハ下司は海どもがたのたてにいりひる神

士たぐ 宗のつれたはは物

つれに森む一ふまきた 暮がへ

附ぐるろ花見ふゆきて宿のとま待べきなけ

まばちひれた家に志ひて森と水たたく家

ろくたおまでもちりたとなりはれども

たるそのたなた申よた一ふまきたが下

何ぐりきふろの上よて森むと之ゆりた

旅森なりりり

昨 塔のちりり 雨段む 嵐穴

馬の糞 かく ぼもいろり

あ向 昨 塔の下まぶろちかききて 嵐穴もあ

る之後 向 馬の糞 かく いろの 塔とあふべ

附 塔

七十八



本字あけ小ども句中の春夕見はかめし  
といぬもわろし 波女の吊

梳りゆに來れどおふし 夷 漢

あはれ引ちがへたる 舟合のかれに波女の年忌の  
とむらひせむとて梳りゆに來居こちらハ夷漢  
小て客の何よはま之係のくりくとも夷漢の  
家ハたもなましく 波女の吊をばふハ借家と  
さゆるが梳りゆに來居しどおゆるく 夷漢ふ  
て梳りもがたむらしく 波女の年忌もけりよ  
りといぬの何しくらむと心づかひしたるはまふ

とりたかりたり

松何ろびのふけく床る傍まは

る里ろのまゝ 舟のまゝぬぐ

お向ふていたゞ 傍まはの松何ろびみ出てふけ  
てもどりしきぐくなんぞ後句のさるハ波乃  
お女などを寄て何まの何けがれ船出さむと  
ゆふし松あけてゆくれゆりめいしく 舟に森る  
はまたあらむらあふおどやああらぬ  
ゆりもろハきぬ中ハ生 碇  
いあゝほど 誦よし生なた月ゆるれ

係の人懐世態

摺舟に植くまづくタラシ草子

隣子かさね敷宿坊の舟

をりた附合なりり舟ひとつ宿坊の草  
敷つてそそぎのよは隣子をかさね曲突ツグイの草  
小摺舟に植くる草子よの素よりけり  
はも何よりべしお白の庵がりしをう庭西で  
つけばたすのりなるべた小者坊舟と偏た  
るハぬの又ぬ  
考よりし望まぬり此花はより

百姓やきむ者代乃後

花のけりりを考よりしのみおりまはる人を  
和何より此百姓の者代対もて後やきみと  
見くは附合よや

けひとへ合者 桑の川幸工貞

七十ふたはをよりつとぶ助扶持

お白栗のねた不よりしれま貢ふも粟をね  
てまつるなり附とるはけ國の風俗よてまの  
守より助扶持をたまはるなりべしけりば  
よりハ扶持をよりし年よりしよりしよさまめ

粟を直ぐふる古風ちほふは何ぞもささる  
まゝとてたしうらぶよたぬありかへさくもさ  
ういをたふれりもつゝなれどぞや

三尺通り意のちしうけ

涼しき空田の出崎よくええ

涼風幽居趣

軽とほ牛乃方細やきむは

里に寺の男此たけり入り

いふちのりたしめが

其日にまどる 総のくさびル

押 結は海をの口をくひうねく

かくまどく世態ふりてりたるのほや  
まゝとてよんちて泣くむだし  
あ白人小やれ  
くふく一飛旅をどふゆく人の身は  
何のふを日かへめにさるるな  
べし附るるかく  
たしめ一がく見ゆる世の中は  
山くま  
める月うなといはさるる  
はくもく世の  
中ハりてめがたもの  
かなくなり  
身を  
に  
してもはくひうぬ  
まのらと何り  
水くた  
る之  
は  
を  
と  
り  
ふ  
ま  
あ  
白  
れ  
う  
つ  
め  
い  
と  
し

舟

舟

尾小尾をつけく 吐きま筋  
田の沖に堀をぬ 石の年ふりし

あふき世はゆく 何る附合之赤ま筋を人小ほと  
らむとて尾小尾をつけく いまはくた不たまひ  
のーい人懐あり 附んるのまら筋い田をたびた  
とーくもつとる家農と見て年久く持てる田  
か中に大きなる石の何るがら水かその田はぬ  
などいひつとくむくしめ堀のくさるなりぬ  
石ありとかくはちまいうも百姓ぐものおが  
りあるべー

世之小尾つく 月流ちるは

と花の時流いあめて 度ぬられりめ  
けむかたが花の体といはま文字なるりまてつ  
たる之上平いと高た人のちくゆめたるはめてな  
ちありたるといふ俗強ありたが花の時分には  
父ハ花れありといふるこ  
産之尾小青の筋深を引ちら  
二返はしは子れよむき 尾は

あむハたびた、したまを深を産之尾小引ちら  
したくころの赤ハ子どもたやくて二返まは

附合

八十三

子も何よ。はまへきべくもどもいそがしきまの  
あふれはあふふよくあぐく

まほいせね<sup>子</sup>ね<sup>子</sup>のくはね<sup>子</sup>の者

帳<sup>ニ</sup>の伝をいこむおおせん

うららの人おあよべ

手よりく身は是輕の追がう

位く酒のむみおのあ

毎益子まよるりを追がうといひあよハ

大津島の追がうあどつ子伝は省おあ白の

あろへ生は是傳のあれは花はり春よもあよ

まこいふ追がう一垣本ふて人はいやめらあう

ちをいれよくあをねと君あねとあう之後

句も一あめハやりめろの迹<sup>ニユウククイ</sup>て酒のむは

はこあゆれどあをやうくハ君のああおのあ

あれて酒たう一はハ手久くあふつうへてまの

あぐるあもものあめねどあうとバヤさああ

あめがくはつとがくしてまことにはああは是傳

の追がう一うと思ひつはに手よりたああ

か伝<sup>マウガ</sup>あなれたあ何ひつはあを酒あむせび

く酒もえのまぬあまふとめりうへたあ係乃

対  
給  
六  
廿  
七  
廿  
七  
廿  
七

公羽のぬき返之

どろりと摸小風の何なるはさる

稲 盗人の 恨を 解 やは

お白のきこえたはまよ之た。夜中のやうきとて  
いりゆるせ何らし。盗盗人をきりたるを  
ゆるして解やりたる。物不附あり  
月見れば、秋ふふ足の出まらん  
とほひく。さあはさく。ゆくやら  
お白月見れば、あつたものさうかた。いり水赤  
なみとつ。秋ふ何らぬと。いふはさるる。月

を見れば、あまぐのり。お思ひ出さるものなむ。とて  
向ハ何ともお白はさる。へふなたふた。月よ。お物と  
つげ。いひほしたる。之は。松をう。き。ふ。べ  
返ふ。剥る。何ら。は。な。り。め。い。解。結。ふ。

仕 付て 是は 甚 知 算 方 の ぬ ぬ  
田 を 種 は 向 直 江 の 稻 乃 志 来

た。どめの白いりゆる。樂刺とりふ。むつ。と  
た。ど。剥きて。た。は。之。二。の。向。此。附。を。る。解。が。さ  
— 後の白ハ算方結方。つ。よ。に。向。直。江。と。び  
う。せ。く。各。之。と。く。双。方。曲。名。家。の。り。め。の。り。を。さ。ら。せ

解 結

三十一

たはあり

風ひやうりそーぎれづくのま

明ホウ山バイに角力のあまのついでに

風ひやうりそーぎれづくのま

藤之内へおぼれどもめの草ナムダイゴ大慈

豆またたしまふまふまふまふまふ

おぼれどもめを二年のぬめのねとるは附合を

藤之内まふまふまふまふまふまふ

借之附とるは附合のねもまふまふまふ

もふまふまふまふまふまふまふまふ

たのしくおぼれどもめを二年のぬめのねとるは附合を  
の人乃藤之内まふまふまふまふまふ  
町をらむり

剥ヒげやと世セらふまの紅ま

負軍の者ふ引くかたはあま

おのまふまふまふまふまふまふまふ

ゆめ 老人の紅まの衣を何とみるにたむ

まふまふまふまふまふまふまふまふ

いひたるあらむまふまふまふまふまふ

白軍の者ふ引くかたはあま

藤之内

藤之内

ハ何くまでまをうくつらばをらひ之をりて  
おくべしひごもたさし軍のたす月たうと  
いははもけ松之附ぐるら大ぬの志む志をた  
りりて必後取下さゆる之をぐるら<sup>サ子マ</sup>益  
が弥の直岳を宗盛にもらひたる付も百らむ  
見えし一々慚一言入は月友  
庵の鏡水をさくく保小男盛

附ぐる山里のかくれ家にあろふく住き  
たはかくくくろくめたる友の二人三人つれ  
たち月見ふ来るとまゆりたる之何くまで月を

見つて今ハと松屋一丈のりく燕のたまを  
松の陰まぐ小男麻の小盛なめくらたは  
一たは屋なるべし

何くくは綿子とらせむ弱法師<sup>ヨロホウシ</sup>  
内 殺害者はゆめふ依意之は

弱法師をゆめりて綿子とらせぬ人ハあふ  
人よ何らで人ともつさ一たがひも殺害者は  
とつぬはやどなたは才あらむとの附合  
ちのよべし

松竹見ゆる町の入り

付合  
F=F  
F=F



女房よふ茶屋の真主もさきで

町の入口まぐく批打しゆるハ跡入と見くくの跡ハ

茶屋の真主乃後づれゆくたふさういふとそ

茶屋はうまは茶やだたれいり滑越る

甘みきたりぬの 孫とぬたをさし

た ちなき風乃石 草一来る

さ水も名言た俯向之茶向かていめつよくたけ

き堀をけたなりきく軽くけはしちるまことふ

公の手段たあらで佳くたむつはさるる茶の

孫との水乃ぬくなまをぬたをなりたむむい

六月も寒うらむか休さきあまき句の次より

何とりましくした句たつく屋たふた甘みのけ

一そこのを何らみてまふ甘みといふ風の

た下なたりきたのこたはぬともきかともたを

あまにものち

江波松原の田舎 陸尺

とつあめとねふ入月は島羽濃

けさのさうろちや

糶とちふにまうつ暮のまゑ

むむびとのびる 男足牙

附録

公

上子回ト  
一、度ハ江戸を見たがは小高の  
舟フネとむづフネ舟の所

お向小商人の事懐ふて世の中思ふまゝも  
障のまゝさうねば江戸でも引て一かせぎして  
見とたものゝ思ふならむり懐向もろのん  
なうらうも一てまゝせバやと思ひて舟向  
さうはまゝ

耕カサ他カサのるをよくりはれん  
むくろの志

むく鳥のゆはれハれんも吹て耕他カサのる  
もろのるの時を附え  
尻ヒの縁ヘリにせ産ゴキもおやづり  
る乃降日ヒかたつけふら

ねもしろさ附合のお向尻ヒの産ゴキもおねる  
人ハ人とあるるもせぎ外一あるるもねる  
ふと一日たヒ恐然としてあるるをたのめる  
人と見てたがしらの向まゆり日記たがき  
ろくふ日ヒあるるもさうくりかきつけて  
おくちま之れれど日記をかくとせバ附カサるも

古く一向もつゝなるらむをぬの降日たぐりやを  
かたつけるといふよしく一向新しくなる之が  
はるのをゆく思ふべし

菫<sup>#</sup>を刈りあげて川にひるるを

切 おなで何ちららぶちらへ水はあふ

お向をふのはまと見て穽をふのむしませ  
はまをつけたりの

ふるもたふ葉の江<sup>カキ</sup>に宿るけ

神よかちりくる前髪乃<sup>カキ</sup>露

たぐりた恋の俯向とくそききそ葉の江

とふ必待ぬ一も一たぐひなばねむなをいひしを  
るろしたるに思ひてちぎりしふふ行くか  
くはまで待くれどもつひふ人ふ来ぞてやぬ  
はまこかたのいづられたはなをふべし  
きききといふ文字甚ちうら何れ悔向を  
はなき人の女ふはられたるこそ其の髪が  
たぐりまちある姿たつたけり

かむくと有ぬきたお柱

楯<sup>ホタ</sup>けりけりよも又らは

冬のはなほそきり

ちひはれた顔の身だろなよた  
高もゆるりりと内はねはますりて

むつはぐくめでたき内のちまへ高も繁昌一片  
てまぬ中もよくくく女房もよた人のちひはき  
顔ふ今やうならむけはひておとなした姿  
あらむ

秋も来ても白田の土はひびく  
雨も雀の羽乃たえ 掛ふ草  
おの白ハ跡暑はたけ きたまへ附白いたたの  
対ふり

濡まぬ俵をさくらんけどり  
臺の垣際てくら 砦のたつつきて  
けきとあらるな

徒搦なる者を 汁ふか入る  
店より 翼子 家ハひつとむ  
前白ハ徒搦なる者を料理ぐるもなむむけ  
くけふ汁ふか入つとつふあらるるを後白ふ  
ていさぐく徒搦なる料理く 室もちのま  
はよがれて馳をふ何あはきはふつけくも豪  
家高の人の家づらりふかはがた

國いらまゝ人よものり  
一白い揃がく 佐々度

あらも世態をつくも存附合之若白ハおあふの  
そやと一まご小出てる男はあましく同外の明の  
あまごり京条ありなご一たよついでた尋ねて来  
そんどもおひるもたなくいりやとつふとろ  
ふよめて後白よてハそのまご一たる男ハ國  
う〜ハれのいやりき者よてもたなく水も都ふ  
てハ白まごく揃て艱カ難カさるよさはあまごり来た  
は人よ一おひるもたなく一白揃たまハい

人の世にやふとの附えあらむ  
抱込く松山廣た有ぬや

何よ人さるふ奥くさたあり  
前白月も明らうに若小松山を抱込く面白  
きり一た之後白破さのけ一たと見て何よ  
人もく僕人あらはまこ

け次の上は名のはらら  
腰ふ扶さる宿乃三氣ちかひ  
前白及中のり一きなるをたごちふ宿とつけ  
く宿あご小何るをたはたまをのべごり

分るおなりしに恋を志すれ  
草生ふれもしうけつ伏見の  
お白くまき人の泣きまきまなく恋ふ阿あ  
たまぐさなるをけつて今八思ひたなれ伏見  
阿くめれ信位おたのめ人くちる何れ  
あらたえ  
吸おで産家の空をたきさる  
池後のお堀を又すて来た  
土垣阿くめれ阿家の片まきさるべ  
降まどは阿られまき水の二まきり

手のひらふい〜 ぬるユきさる  
まれも名たは化之阿られまき水のまきさ日ま  
ぬるユをまきはしよあるふてまのひらふ  
とりまき〜まきさ日をに月せたるま〜く一白  
ハ軽く〜たてゑる之依借ハ軽之をまきさる  
まはらよさるあり  
何のふおともまきぬ太きけ  
宿く〜吐のハ軟喧集は清  
お白ハたごまは阿のふお乃何しもまきぬと  
しふくろなるを懐白子及伴のまきさる

や体よきと見つけふとソノベ

ハ 船の礼ハとく 仕迄乃至

船 船の禮乃時々ハづ候

ふ益を思ひつれて積まざる禮の船まむ所

くくハ船もたれが時々もつ候とソノ附合

あらむや仕迄よりくソノにひるせたり

是代之ぬいふほき 屋の陽也

二年 既みちひはさやつら 依させ

幸政の礼ハ先をまぐに迫ふ所よりた

く屋ハ志づらく 家ははれり 是代之ぬ

ソノ附合

行灯の上より 白た 顔つき

あそびに 琵琶をどつり とれ

琵琶一曲 弾終りて 行灯の上より 白た 顔の

是えたるハ 住家女

嫁と ぬき わるにをさく

字ハ皆 実として 志ざる 火燈の旨

何れの所

ねを 借くまふ 出る日の 船月夜

木子 十たより 掃衣た なむ

朝し時の登壇をどりつり何り侍屋敷の掃  
の木ちりねましりた附合ふそ何り

首にものを かぶは掃除日

と化咲てそ糸なつてゆるまの山

掃除日とつりゆり糸を好む匠士と見てま

の山に糸園をつりゆりたのしめはまをつけ

たはと

穴<sup>キウ</sup>尻<sup>クツ</sup>はけり 袴<sup>ハカマ</sup>はるめ

絹<sup>ヌイ</sup>其のちひはき家小かやだて

お向を袴<sup>ハカマ</sup>をぬれぬ人と見くちひはき家

のよろとびりつつけりかめまは絹<sup>ヌイ</sup>其をて

ら〜家<sup>イヘ</sup>子<sup>コ</sup>居<sup>イ</sup>る<sup>ル</sup>を<sup>ヲ</sup>ぶ<sup>ク</sup>る<sup>ル</sup>を<sup>ヲ</sup>ぬ<sup>ル</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>ち<sup>チ</sup>の<sup>ノ</sup>ち<sup>チ</sup>の<sup>ノ</sup>ち<sup>チ</sup>

角<sup>ツノ</sup>力<sup>チカラ</sup>に<sup>ニ</sup>ま<sup>マ</sup>け<sup>ケ</sup>〜い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>ぬ<sup>ル</sup>

山<sup>ヤマ</sup>ら<sup>ラ</sup>げ<sup>ゲ</sup>ハ<sup>ハ</sup>山<sup>ヤマ</sup>ぶ<sup>ブ</sup>〜村<sup>ムラ</sup>乃<sup>ノ</sup>一<sup>イチ</sup>か<sup>カ</sup>は<sup>ハ</sup>

村<sup>ムラ</sup>の<sup>ノ</sup>糸<sup>イト</sup>角<sup>ツノ</sup>力<sup>チカラ</sup>な<sup>ニ</sup>ど<sup>ト</sup>ふ<sup>フ</sup>た<sup>タ</sup>め<sup>メ</sup>れ<sup>レ</sup>と<sup>ト</sup>そ<sup>ソ</sup>と<sup>ト</sup>人<sup>ヒト</sup>ま<sup>マ</sup>の<sup>ノ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>不<sup>フ</sup>こ

り<sup>リ</sup>た<sup>タ</sup>る<sup>ル</sup>が<sup>ガ</sup>思<sup>シ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>の<sup>ノ</sup>外<sup>ソト</sup>に<sup>ニ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>め<sup>メ</sup>ま<sup>マ</sup>け<sup>ケ</sup>て<sup>テ</sup>面<sup>オモ</sup>目<sup>メ</sup>な<sup>ナ</sup>を<sup>ヲ</sup>は

は<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>〜の<sup>ノ</sup>山<sup>ヤマ</sup>ぶ<sup>ブ</sup>〜村<sup>ムラ</sup>の<sup>ノ</sup>山<sup>ヤマ</sup>伏<sup>フス</sup>な<sup>ナ</sup>ら<sup>ラ</sup>ば<sup>バ</sup>〜ほ

を<sup>ヲ</sup>か<sup>カ</sup>〜ら<sup>ラ</sup>む

林<sup>ハヤシ</sup>火<sup>ヒ</sup>は<sup>ハ</sup>〜は<sup>ハ</sup>糸<sup>イト</sup>ふ<sup>フ</sup>に<sup>ニ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>〜鹿<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>花<sup>ハナ</sup>

古<sup>コ</sup>か<sup>カ</sup>き<sup>キ</sup>は<sup>ハ</sup>が<sup>ガ</sup>〜春<sup>ハル</sup>の<sup>ノ</sup>風<sup>カゼ</sup>す<sup>ス</sup>ぢ



前白ハ山ノゲの庵ま〜ササとてもた〜ハ〜  
 ちどづ〜山よ入りて〜  
 後白ハ庵の花といふよ春風の吹を〜  
 ちがまけ〜きたぐ春を〜  
 むらひのか〜のた〜  
 一升ハ代をもて〜  
 か〜白ハ洒落〜  
 は〜白〜  
 袖イタキのツ花キ此キ 柳もとの先  
 皆ハ常キ木キハキまキうキぬキふキたキえキてキ〜

前白柳もとの先ハ袖のなく不を〜  
 ま〜見〜  
 うぬにた〜  
 ま〜  
 衣イ冠カ〜  
 つ〜  
 大ハの〜  
 所セをウ此キ顔カ小コ 編ヒ〜  
 前白ハ〜  
 後白ハ〜

形余

六十五

けふ浴もせむもくらげ海も立も送ぎての  
はくと之

新 約 体 あり 強 倉 君 の 浦

大なるのわづりて 田よも 白田よも

ほえちや

えちやぐらふとく 室 底の樽

舞もつよふく 能母の泣けく

よらのりよて 甚きふ一 旅さちのどきるは

まゝとて 体 附合よや

ぬらひのゆる 抱子を 笑さる僧

冬 枯のぬき母をしむ おお西返ひ

寺など 此まがこよや

間が 西手バ又見たく なは 陰の 枕

とも にも 手よる 逢 坂乃 枕

いりぐ ならむ 解し けす

おふち かけ 室 おおの 西に ぐれ

膝 置を 目利の うち 子 片付く

上小回

かけ 抱の 布衣之の 親に 月片して

万の やいと 小 たり ぐん なる

百とろのろのろふ日もくわむうむたるうけもの  
布他之の顔に月もあしきりくさても出たら  
むたやいよきりくはるくとつふをうこの  
附合え

かちの何ハ舟を先何がはあり  
早徳山ハのさくらだ花の咲掛ひ  
何りのまゝ之

美殿のまゝそれの沖乃大わらひ  
ちふこの小祢直も宿ふ下り  
沖のりあどよや

お平<sup>ニ</sup>の屋<sup>ス</sup>の屏<sup>ス</sup>凡<sup>ス</sup>小<sup>ス</sup>絵<sup>ス</sup>り<sup>ク</sup> 輝<sup>ス</sup>  
面<sup>ス</sup>親<sup>ス</sup>ふ<sup>ス</sup>ち<sup>ス</sup>か<sup>ス</sup>け<sup>ス</sup>く<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>な<sup>ス</sup>ち<sup>ス</sup>ハ  
懐<sup>ス</sup>向<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>屏<sup>ス</sup>凡<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>画<sup>ス</sup>之

霞<sup>ス</sup>ふ<sup>ス</sup>け<sup>ス</sup>は<sup>ス</sup>ば<sup>ス</sup>や<sup>ス</sup>ん<sup>ス</sup>お<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>役<sup>ス</sup>  
子<sup>ス</sup>ども<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>が<sup>ス</sup>侍<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>何<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>そ<sup>ス</sup>ひ<sup>ス</sup>て  
とも<sup>ス</sup>お<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>け<sup>ス</sup>は<sup>ス</sup>家<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>何<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>た<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>む<sup>ス</sup>お<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>ん<sup>ス</sup>  
た<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>む<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>何<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>そ<sup>ス</sup>ひ<sup>ス</sup>て<sup>ス</sup>な<sup>ス</sup>ん<sup>ス</sup>お<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>ん<sup>ス</sup>役<sup>ス</sup>を  
もう<sup>ス</sup>ち<sup>ス</sup>け<sup>ス</sup>せ<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>ど<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>け<sup>ス</sup>は<sup>ス</sup>ま<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>附<sup>ス</sup>ど<sup>ス</sup>ろ<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>ま  
み<sup>ス</sup>く<sup>ス</sup>な<sup>ス</sup>ど<sup>ス</sup>ろ<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>伯<sup>ス</sup>夷<sup>ス</sup>叙<sup>ス</sup>齊<sup>ス</sup>が<sup>ス</sup>侍<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>何<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>べ<sup>ス</sup>  
結<sup>ス</sup>え<sup>ス</sup>ふ<sup>ス</sup>下<sup>ス</sup>急<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>烏<sup>ス</sup>帽<sup>ス</sup>子<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>か<sup>ス</sup>ぶ<sup>ス</sup>し

幕を志す水は皆心をとれ

あまを

垣越ふちよつと 鹽シホのれつめて

昔流のうちの小屋で火を焚火

備れ鹽をかりくるは昔流場のくさし

くつけくるこ

彼岸のぬくはこそやかくある

昔せのハとふもえさつちさの流

南都春色目前

上下の橋乃流くる川のさる

く田の中流乃流つく

浩水コウスイ後のくした田の中も水は流のふを

わなを

枝一本たえのわきだ

聖鳥ホウはるれも神はぬらさるて

おさうなだ流ぐるは枝ひとつを乃のりき

ざしもたのそくたざりゆるは聖鳥のさ

ふも流とび水むまことに家カ中の情ナを

だ

77  
合

芭蕉翁附合集評注下卷終

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]*

蕉門仇諧書肆

大坂心高橋通

奈良屋長三清

同

卷三即

心

